

りの先生、三國街道吹路部落にある、私の山房へ、久しぶりに立寄つたのは、私が上東の仕度にかゝつてゐる處だつた。隅々會つて語れば、山の話に決つてゐる。私は彼を山房に泊めた。翌る今日、連れ立つて山房を去つた二人の行路は、奥平温泉部落まで同じで、そこで用を達すと、私は須川溪流を下つて後閑驛に向ひ、逆に莊平くんは須川溪流を溯つて、目的地の四萬方面に向ふ。三日後には、上越南線澁川驛で再會上京の段取りだ。私達の東京の住居は大森にあつた。四本の脚は、既に奥平温泉部落から、六丁手前に入つてゐた。

「莊平君は此の邊まで、來た経験があるんですね？」

「はあ。これから奥は、僕の未踏地です。」

「わざわざ出掛る物好きもないやうだ。君のその化石の寶庫は、こゝから凡そ十二軒の登り下りで、平地のない悪路だから、その覺悟で歩くんですな。途中に石門山とか、觀音瀧などの奇勝がある。この瀧は馬が自殺を企てた處だ。奥平温泉部落附近の牡馬でしてね。日ごろ懸想してゐる牡馬の姿を、山道の彼方に見つけたので、この時とばかり、猛追撃を始めると、牡馬は驚いて逃げ出した。逃げてゆくうちに、觀音峠の嶮崖から脚を迂らして、千仞の瀧淵へ、眞逆様に鎮落した。おくれて駈けつけた牡馬は、たゞ茫然として、崖頭から谷底を覗いてゐたが、忽ち高く一聲嘶いたかと思ふと、巨驅を

宙に躍らせ、瀧淵めがけ飛込んだ。自分のために非業の最期を遂げた牡馬の後を追うて、悲愴な心中だてをしたんですな。」

年中人影もない廢墟のやうな、寂しい温泉部落の入口で、私はこの素人化石學者杉坂莊平氏の、前途を祝福して、杖を分つたのである。

## 二二

四萬へ通ずる山道は、雨見山の腰をからみ、溪谷に沿うて、次第に高まる。脚下の谷底から湧き上る。藪鶯や駒鳥の流麗な韻律を聴きながら、午さがりの暑い日脚をバナマにうけて、坊つちやん莊平は、こつこつと登りゆく。山の腰は海拔三千尺に近づいて、急峻な峭壁となり、道を壓して來た。觀音峠だ。遽に狹まる道は、峭壁を繞りつゝ、くの字に折れ曲つてゐる。脚を踏み外して、奈落へ落ちた牡馬に、牡馬が殉じた難所が、こゝである。深山芋環、鷄冠、岩菖蒲、山紫陽花、甘草の花、綾に咲き亂れる夏草の中、石像の觀世音菩薩も尊く、鬱林に蔽はれて青空の一片ものぞめない、幽邃な峽谷をへだて、眉に迫る山腹の瀧を眺めておはす。何たる美景だ！ 綠蔭にかゝる觀音瀧は、白絹を垂れて音もなく、谷底へ消えてゐる。そこから吹き上げる暗風は、氷のやうに冷たく、總身の汗は凍る



かと思はれた。莊平くんは、急勾配の狹隘な峠路を、下り下つて、遂に溪流へ出た。朽ち壊れた丸木橋を渡れば、四萬道から岐れて、瀧淵へ紆る薄暗い踏跡一筋、莽草に埋もれ、鈴をふるやうな河鹿の唄聲が聞える。どうして、こんな怪しげな險路を冒してまで、瀧を見る氣になつたものやら、彼自身にもわからない。老樹に絡まる羅生門葛や、木通の蔓につかまり、飛沫に濡れた深草を踏み分けながら、一二丁下ると、莊平くんは奔湍の岸に出た。瀧を眺めるには恰好の岩盤に匍ひながら、鼻の先で裂咆する瀧の壺を、怖々覗いた。彼は實に意外なものを見た。白衣の女が瀧壺の巨岩に踞んでゐる！俯向きに、眼をつぶり、齒を喰ひしばつて、涼々と落ちる瀧の水に、打たれてゐるのだ！黒揚羽の蝶が、群をなして、女のまはりを狂ひ飛んでゐる。この奇怪な光景に、莊平くんは、身を縮め息を呑み、驚異の眼を見張るばかりだつたが、瀧壺の手前の磧に、ころがつてゐる山刀に氣がつくと、

「おヤツ。」

總身の毛が逆立つた。瞬間。白衣の女は蒼白い鎌首を擡げて、こちらを凝と見た。煙る飛沫の中のその顔！濡れ髪へのばりつく凄しい顔！閃めき光る蛇のやうな眼！忘れようとて、忘れられない狂女芳枝ではないか！白衣と見たのは、絹の一重の振袖であつた。咒はれた寡婦の黒髪は、赤い扱帯に括られてゐる。あゝ！三國峠の大般若塚から、男の鐵脚を以てしても、一日では無理である。難

儀な山坂六里の、こんな山奥にやつて来て、驚くべき荒行を演じてゐるやうとは、誰が思ひがけやう！

「ヤツ。汝は！」

と、飛瀑の中に突ツ立ち上る彼女が、猛怒の形相こそ、血に飢ゑし残忍兇惡の白鬼、さながら、ひらりと磧へ跳び移り、ぶるぶると身を震はして、水を切るや、攫取つた山刀。

「ひゝゝ。殺されに來たかつ。」

と宙を飛んで來る、足も鱗の人間業でない。莊平くんは、身に迫る生命の危険を、頭の頂から、足の爪先まで、この時ほど強く感じたことはあるまい。何の因果で、二度までも、こんな憂目を見なければならぬのかと、つくづく考へたのは、命びるひをした後のことだが、灌木の深藪に潜り込んだ莊平くんは、火の玉のやうに熱くなつて、盲目滅法、息の續く限り逃げた。潤葉樹の密林が、恐るべき追跡者の眼から、彼の姿を遮り隠してくれたので、どうやら助かりはしたものの、眼界の開けた明るい山脊に、顔も手も傷だらけの姿で這ひ出した時は、哀れな迷ひ子だつた。偶々遠い南の空に、浅間の噴煙がのぞまれ、東の空に赤城が眺められたので、彼の足が石門の南尾根を踏んでゐることに氣がついたが、西空の白砂連峯に、傾きつゝある太陽を見ては、落着いた思案は、おろか、安堵の息をつく間もない。彼は四萬峠と思しき山の鞍部へ襲來する蝸の群と闘ひながら、へとへとを體を、痛い



足にのせて、歩き出した。やがて蓮華躑躅に石楠の群落の中に、散らばつてゐる粗末な炭焼小屋が目  
に止つた。元氣づいた彼は、最も近いその小屋の、荒席を帷幕にした戸口から土間へ、のめり込んだ。  
煤つぽい吊し洋燈の真下に、赤犬の毛皮を敷いて坐り、圍爐裡で煮物をしてゐる乾鰯のやうな、かち  
かちに干からびた婆さんが喫驚した。莊平くんは、山刀の女に追ッかけられ、四萬へゆく道を失つて  
來た事實を、正直に白狀した。

「すみませんが、水を一ぱい載きたい。」

「水はその桶にあるので、勝手に飲まツしやい。へへえ！ さうかね？ そりやア偉い目に遭ひなさ  
つたな。觀音瀧に打たれてゐたつて？ はあて、奥平の芳枝様ぢやねえかな？ あの人の他に、そん  
な狂態ぶつ女は、この近在にゐねえがなあ。屹とさうだよ。呆れたこツた。」

「お婆さんは、知つてゐるのですか？」

「はあ、おら達、炭焼に取つちや、問屋筋のお嬢様ですがすよ。どこまで正氣で、どこまで間違つて  
るんだか知らねえが、常人には出來ねえやうな、馬鹿な眞似をするんだから、狂人には相違ねえや。  
情夫に棄てられて、氣がふれてからも棄てた情夫を戀慕うて搜し廻つてる。淺間しい話だが、女一人  
氣違えにしツ放しの野郎だつて、碌な報いはあるめえ、と思つてゐたら、案定、大怪我して斃死りや

がつたま。」

「へへえ！ 死んだんですか？」

「あゝ。一昨日の晩、息を引取つた。野郎。越後邊の炭山を、迂路つき廻つてゐるうちに、渡鳥の炭焼  
仲間聞いたんだね。お嬢さんが狂人になつて、お前を搜してゐる。お前の顔さへ見りや、眞人間に  
還る病氣だから、早く元の巢に舞戻れ、と言はれ、根が悪黨ぢやねえから、狂人になつたと聞いて喫  
驚、濟まねえことをしたと思つたらう。越後から飲まず食はずで、法師温泉まで歩いて來たのが、一  
昨日の晝頃、あれから近道をしたのが、野郎の天命だね。赤澤林道の山崩れに出會して、頭の鉢を柘  
榴みてえに叩き割られ、血みどろになつて、この炭山に匍ひついた時は、半分死んでゐたよ。あれは  
棄兒の勇吉といつて奥平温泉に棄てゝあつた旅人の兒だが、山の衆が養つてゐるうちに、野郎、のツ  
べり面のやくざに育ちやがつて、埒もねえ、女の子ばかり、泣かせくさつたよ。ふわツ、ふわツ、ふ  
わツ。今夜はその死體を焼くんで、家の爺さまも、山の衆と裏谷さ、出掛けただ。」

婆さん、羨びた口を達者に叩く。法師温泉から赤澤林道の捷徑を取つてゐたら、自分も遭難したか  
知れないのだから、廻り道して、狂女に惱まされるのは、幸福な方だらう。莊平くんは感慨無量の思  
ひで、水呑茶碗を置いた。と、頑疊な爺さんが、戸口から入つて來た。



「おゝ。御苦勞だつた喃。爺様。」

「うむ。山下の吉兵衛小屋に、飯泥坊が入つて、お櫃ごと拉つていつたツてんで大騒ぎしてるとよ。」

「飯泥坊が？」

「うむ。山窩が入り込んだらうツてよ。やア、これは旅の衆。石門洞見物かね？」

「は。いや。」

莊平くんは慌てゝ腕時計を見た。四萬への道を探ねると、正南半里の峠から一里半の下りといふので、禮をのべて小屋を出た。蒼茫たる黄昏の色は山を罩め、薄闇は既に足元へ忍び寄つて、漂ふ槽氣は肌<sup>はだ</sup>に泌みるほど冷たい。ともすれば消えかける小徑を辿りながら、峙らしい山凹を、暗い窪地の彼方に望む地點についた時は、はや、暮の空に美しい星が、輝きそめてゐた。深山の夜を獨りゆく心細さは、犇々と身に迫り、寒氣は堪えがたくつのである。炭焼小屋でもあるのか、鬼灯大の火光が、脚下の窪地にぼつと揚つた。

「おゝ焚火だ！ あたらせて貰はう！」

人が戀しい。火も戀しい。嬉しくなつた莊平くんは、滑りころびつ、窪地へ下つたが、近づくにつれて、彼の鼻を衝くのは、火光から流れ来る、嘔吐つくやうな、不快な異臭だつた。肉の焦げる臭ひ

だ。莊平くんの頭を、陰慘な考へが掠めた。

「勇吉の死體を焼いてるんぢやないだらうか？」

その通り！ 炭焼の焚火ではなかつた。勇吉を焼いてゐたのだ。堆高く積み組まれた太い薪の上に勇吉の死體は仰向けにのせられ、火の手は既に、全體を包んでゐた。渦巻きのぼる黒煙の間から、青い、赤い、黄色い焰が、ペロペロと舌を吐いてゐる。その蔭に黒い人影の、もぞもぞと蠢くのが見え

た。

「隠亡役の山の衆だな？」

鬼氣人に迫る光景だが、恐れる筋はない。黒い人影は、二三間の背後に、莊平が近づき立つてゐることも知らぬらしく、死體の膏の、じりじり燃え沸る邊から、何か掴み出したものを、恭しく戴いた。

「神様よ！ おらは聞いて知つてゐるだよ！ 死人の火で、握り飯さ焼いて食べると、戀しい男に巡り會へるてな！ 何處にゐるか知らねえが、おらの勇吉さに、會はして下されや！ お慈悲だ！ 勇吉さに會はせて下されや！」

空を仰いで叫ぶ聲は女であつた。彼女は焼いた握飯を囓らうとして、ふつと背後を向いた。狂女芳枝ではないか！ 燃え上る火焰に映えて、食人鬼にも見える怕ろしい顔！



「うわあッ。」

悲鳴をあげて跳び上つた莊平くんは、いかにして此の危地を脱し、いかにして四萬へ遁れ得たか、はつきりした覚えがないのである。

#### 四

「二度あることは、三度あるといひますが、よくも三度目に、腰をぬかさなかつたもんだと、思ひますよ。」

「縁が深いね。だが君は、石門山の窪地で、死人を焼くことを、あの狂女が、どうして知つて、他家の飯まで盗んだと思ふかい？」

「偶然に行合せたんぢやないですか？」

「いや、私は奥平温泉で聞いたんだが、狂女に髪を切られた後家の皮肉な細工さ。勇吉の死體であることは秘して置いて、人を使つて狂女の耳に入れたんださうだ。瀧の荒行も握飯を焼くのも、あの山間の迷信さ。」

莊平くんと私とが乗つてゐる上越南線の上野行列車は、赤城の裾野を走つてゐた。

## 山の灯

燈火の電化は、随分邊陲の山間でも、ドシドシ行はれつゝあるので、その土地の住民はもとより、旅行者の感ずる便利は非常なものだが、それでも、足一歩、山に踏み込むと、まだまだ火出、行燈、石油洋燈の類を用ひて、何等の不足をも感じない人家が少からずあるし、電燈の光の明るさを知らない人間が夥しくゐるのである。然しさういふ山の中や邊陲の土地でも、必要に應じて、それぞれ變つた燈飾……夜間照明法が工風されるものらしい。そのなかには殊更に傳統的な習俗を守つて、篝火のやうな古風なことをやる土地もあるし、また間に合せの思ひつきなものもあるが、それぞれその土地の風俗などが、それによつて窺へることもあつて面白いものだ。私が見たものゝ中でナンセンス味のあるやつが二つある。

浦佐の毘沙門といへば、南越後では有名なもので、清水トンネルから七ツ目の驛で下りて、坂を登つたところにある。この山利が三月三日の祭りには、雪の山越え野越えして、押出して來る村の衆や



町の衆で、目醒ましい混雑を呈するのだ。男は家を出るときから禪一つになつてゐるものもある。遠方から来た者は、山門の中で着物を脱ぐのもあつて悉く素つ裸だ。境内には雪が五六尺つんでゐて、そのうへには一面に蘆の葉が敷きつめられてゐる。裸の連中は先づ堂側の泉水に飛込んで、水垢離をとり、毘首羯麻の像を安置した本堂へ、サンヨ、サンヨの掛聲勇ましく駆け上つて禮拜する。これが毘沙門天の御利益にあづからうといふ當夜の法式だが、なかなか以てさう手軽に行かないのである。

第一に人が多くて混むので上れないところへ持つて来て、これも素つ裸の男が大勢、階段の上に頭張つてゐて、威勢よく上つて来る裸組を、片つ端から突落す。つまり佛の御足に近づかうと努むる者の道を塞ぐ悪魔の役割を演ずるのだ。参詣人同志の競争が既に激しいところへ、正面から妨害されるので、これに抵抗して本堂へ上るとすると、勢ひ争闘は免かれない。そこで揉み合ふ。押し合ふ。人の頭を踏臺にして頭から頭へ飛び渡る。殴る。突倒す。喚く。怒鳴るといふ亂闘騒ぎが、夜通し続くのだ。暑くてたまらなくなると、泉水に飛び込んでまた出直す。随分亂暴な佛信心もあるものだが、これが昔からの風習とあつては驚き怪しむ者もなく、寧ろこれでなければ、お祭のやうな氣がしないらしい。怪我人の出ないのが、毘沙門様の御利益だと言ふてゐるくらいである。苦勞苦心して堂内に入り得た者は、一張りの小提灯を持つて出て来る。何處にそんなものが設へつけてあるのか

知らないが、その提灯を首尾よく家へ持つて歸れば、その年は幸運に恵まれるといふので、家では大祝ひをするさうだが、これとても、なかなか巧くは行かない。何うやら斯うやら手に入つたと思ひながら、提灯を持つて出て来ると、堂外に薙めき合つてゐる連中がダツと雪崩かゝつて、無理無體に奪ひ取らうとする。やるまいとかかる。この悶着がまた激烈極まるもので、提灯はズタズタに引裂ける。さうなると今度は骨だ。提灯の骨でも有難いと見えて、竹骨の奪ひ合ひに死力をつくすのだ。殴られ踏まれ、夜つびて奮闘しながら、どうしても堂内に入り得ず、ヘトヘトになつて歸路につく者も澤山あるらしい。

こゝに異彩を放つてゐるのは、勇猛壯烈にして而も頗る奇怪なこの裸體戦を、いよいよ奇怪に浮出して見せるところの照明法なのだ。それは本堂に立てられてゐる蠟燭……大きいになると直径二尺もあり、重量三十貫もある偉大な親蠟燭と、その肩に立てかけられてゐる子蠟燭の灯なのだ。これは浦佐民謡「サンヨ節」にも唱はれてゐる。

あがる蠟燭あ日本一よ

獅子に牡丹は長岡で

二十五貫は小千谷の講中



みんな合せりや五百貫

ハ サンヨサンヨ

積る白雪や一丈と五尺

裸でかつぐ大蠟燭

だれは肩から腕へと垂れて

押し合ひ祭は度胸だめし

ハ サンヨサンヨ

とある。押し合ふから「押し合祭」といふのだらう。長岡も小千谷も此の附近の町だ。牡丹に唐獅子の色模様などは、支那から傳來した蠟燭の模様ではあるが、これほど筥棒な大蠟燭は、本場の支那にだつてありはすまい。いつの時代から始まつたのか知らないが、これは押し合祭のときだけ、特別に製造するんださうで、堂宇を燈飾するにも大きいほど壯嚴に見えるし、裸體戰の實演も薄暗くては危険だといふところから、山國の人達が考案したんだらうと思ふ。この大蠟燭に灯をともし、その肩から芯に凭りかゝるやうに、幾本もの子蠟燭を八方から立てかけて、それにも燈をつけるのだ。火焰は一つになつて炎々と燃えあがり、境内は夕焼の空に似たる明るさに照される。山國の雪の中だけに奇

怪でもあり、神祕でもあり、物凄くもあつたが、そのなかに一脈の滑稽味を覺えないわけには行かなかつた。蠟燭のせいか何うかは知らぬが、この堂宇の山門は二度も焼けてゐる。

「洋燈といふものがあるから今日は便利になつたものだ」と言ふ人達の住んでゐる炭焼部落だ。木炭の産地たる奥上州の、利根と吾妻の境に近い雨見山を南へ下ると、須川川の水源に出る。新緑につままれた海拔三千尺の谷間に、夫婦二人の膝を容れるだけの窮窟な炭焼小屋が六戸ほど塊つてをり、人口十五人といふが、そのなかで親分の小屋だけは七八人を收容し得るだらう。部屋は一間だ。壁は胡桃の皮で窓掛は藁。椅子は醬油の空樽で度蒲團はサン依法師と來る。「わしらのやうな炭焼は山の生木を引裂いて、炭竈の中で逆様にして焼くんだから、罪障が深くなつて餘りいゝことはない、吞氣なことだけが取柄だよ。」

「わしなんざ此の山奥に入つてからもう三十五年になる。汽車は一度見たが、自動車も電車も話に聞いてゐるだけだ。婆さんや娘は三年に一度ぐらい里へ下るが、わしは十年前に出たつきりだ。足が悪からね。」と親分の瀧造爺さんが言ふのである。

この人達は男も女も腹一ぱい飯を食ふのが無上の楽しみで、爺さんも婆さんも一升飯を食ふ。娘の



カツミなどは食ひ盛りの十八九で、おまけに獵犬のやうに山の中を駆けまはり、山刀をふりまはして働くから、腹もすくだらうが實に一升五合の大飯を食ふのだから驚く。そんな娘だから食ひ氣一方で色氣なんか教へても解るまいと思つてゐたら大違ひ。やはり年齢だ。いつの間にやら情夫を拵へて出奔しちまつたのである。娘の親爺さん平生新聞なども讀まないの、世の中のことは全く知らないのだが、近頃は日本と支那とが戦争をしてゐるといふ話だから、どんな様子か知りたいと思つて、炭を運び出しに里からやつて来る馬方に頼んで、折り折り取り寄せて見た。そのうちに婆さんまでが戦争記事を書くことに興味を持ち始めた。そのころ田舎りの興業師が滿洲事變の活動寫眞を持つて、この炭焼部落から三里ほど下流の布施といふ宿場へやつて來た。こゝで製絲工場の繭の乾燥場を借りて、木戸錢十五錢で見せることになつた。そのことが馬方の口から炭焼き婆さんの耳に入つたのだ。活動寫眞は珍らしくもあるし、戦争の實寫とはいふし、是非見たいといふわけで、娘のカツミと七八人の若者を引率して、三年に一度しか姿を現はさない布施宿へ下つたのだ。

さうして活動寫眞を滿喫してしまふと、眞暗い山の夜道を炭焼小屋に向つて、ともすれば弱音を吐く若者達を勵ましつゝ、歸り着いたのが夜明けごろだつたといふ。娘に戀人が出來たのはその時だつたらしい。男は部落の者だ。それに唆かされたものか、娘は小屋を飛出した。村里から炭の運び出し

に來た馬方の馬をさらつて逃げた。男は近くの峠で彼女の來るのを待つてゐた。そこから馬首を列べて駆落した。奥深い山道を馬に鞭打つて駆落するところが、山育ちの男女らしいのではないか。事の次第を知つた部落の人達は、今更のやうに驚いて捜しまはつた。山里は人が少いので、誰が何うしたとか、何處にゐるとかいふ消息はすぐ知るから駄目だと男は附近の村に隠れてゐるところを發見されて連戻された。然しかうなれば一層のこと、二人を夫婦したがよからうではないかといふ世話焼があつて、それに決つたのである。其時私は山の友である布施宿の炭問屋に泊つてゐたのであつたが、「今夜はカツミの結婚式で、呼ばれてゐますが、あなたもおいでになりませんか」と主人に誘はれて、物好きにも三里の山路を一升徳利さげて行つたわけだ。前に言つたやうな娘の戀愛沙汰は、歩きながら聞いたのである。

かくて炭焼小屋の結婚式に飛入りの客となつたが、甚だ奮つてゐると思つたのは、此時の燈飾だつた。平生は薄暗い石油洋燈……この邊では石油のことを臭水といふから臭水洋燈……だ、それを灯してゐるがいかにも暗い。それに今夜一生一度の目出度い祝言だから、迎ふものことにパツとやらうといふ寸法だらう。持合せてゐたのか、わざわざ買つたのか、小屋小屋から持寄つた蠟燭が百本ばかり。それに日本酒やサイダーの空壇が三四十本。その壇の底やら横つ腹を金槌で打ち抜いて、一間しかな



い家の天井からズラリと吊し、餘つたのは家の軒に列べ下げた。それに蠟燭を入れて灯をともしたのである。裸蠟燭の光よりも、硝子を透して放射する光の方が明るいとところから俄かに考案したのかと思つたら、さうではなくて、臭水洋燈使用以前は、小屋小屋でこの照明法を用ひてゐたといふ話だ。家の中はそれで景氣づいた。私に言はせると、これは結婚に違ひないけれども、實際は炭焼連中と炭の取引仲間や馬方などの慰安會なんだから、新郎新婦の盃事が濟んだか濟まないか知らないうちに各々酔つぱらつて盆踊りを始めたのである。結婚式に盆踊りは變だが、この人達は唄も踊りも、この他には知らないのだから、酒が廻れば必ず盆踊りと来る。

可愛い主さんに馬方させて

鈴の鳴るたび出て見たい。

なんて文句の唄を、馬方御自身が唱ひ且つ踊るといつた調子。硝子壘に蠟燭の照明。結婚式に盆踊りいづれも斯んな山中でなくては見られぬ景物だと思つたが、戸外では軒の壘蠟燭が、山の暗闇に燦然たる光を放つてゐるのである。幽寂な佛法僧の啼く音までが聞えて、情趣棄てがたきものがあつた。それは兎角、こんな人達に、眼も眩むばかりの耀かしく美しい大都市の夜の光と色とを見せたら、何といつて驚嘆するだらう。

## 蝸牛の角

亡友夫人經營するところの酒場から「何か思ひつきの宣傳法はないか？」といふ相談を受けたことがあるのである。自分の太鼓はたゞく道も知らぬくせに、他人の提燈なら夜明けまで持つて歩く。世渡りの下手な損な性分だ。噛みしめれば噛みしめるほど、味の出るやうに思はれる點は、鯉節に似てゐるが……うそをつけ……ダシにばかり使はれる點に、おいては、この男、正に鯉節で、しかもダシに使はれてゐることを知らないのだから、ほめていへば殿様である。正直にいふと馬鹿である。殿様と馬鹿は一脈相通するところがあつて、お目出度い限りだ。

そこで酒場の宣傳だが、事明かに宣傳ときまつた以上はすべからず常識を超越すべしと心得てゐる私のことだから、捻り出したる一案といふのが、即ちオワイ屋の車を引く最もきたない牛の背なかにこの酒場の花形女給を乗せて、京橋と新橋の間を、朝から晩まで往復させるのである。

それはよからうといふので、豪奢華麗の花形女給をつかまへて、



「君は牛に乗る勇氣があるか？」ときいたところが、  
「何いつてんのサ。かう見えたとつて、先月まで千葉の田舎で、牛をひいてたんですよ」

といひながら、ドイツ巻煙草の紫煙をプウと吐いた。

それは好都合だ。この美人が酒場のチンドン屋になつて、銀座を百遍も往復した頃、誰かゞ牛の尻を錐で突くならば、牛は美人を路上に投げ出して暴れるだらうから、宣傳効果は十二分にあがるだらうと思つたが、少々穩かでないやうにも考へられるので、錐を持出すことだけは差控へて、この旨を所轄警察署へ申出たところが、牛馬の銀座通行は早朝に限るとかいふ理由で、折角の思ひつきも實行されずにある。

しかし色々な思ひつきの中で、營利を眼目とせず日に一度は銀座界隈に姿を現さなくつちや、寝つきが悪いといふやうな紳士淑女の、大いに喜びさうな目論見がある。山嶽地帯には朝から晩まで小便をしつゞけてゐる小虫がゐるのである。學名を何といひ、如何なる綱目に屬する動物かは知らないが山の人達はこれを小便虫と稱してゐる。

小便といへば不潔に聞えるが、實際はさうでないどころか、無色無臭澄明の液體で、顔などにあたるとひやりとするほど冷いのである。不思議な習性を持つてゐるこの小虫共が、樹木の枝葉に何千何

萬となく密棲しながら、東海道五十三次は廣重畫くところの雨よりも、いや、蜘蛛の糸よりも繊細な銀線をのべつ幕なしに垂れてゐる。垂れてゐる絹糸の雨は、地面に落ちる途中で、幻のやうに消えてなくなる。このはかない小便、いや、液體が燈火や日光を浴びて、燦然とかゞやくさまは、見なければわからぬが、とても美しく涼しいのである。こいつが樹木や人間に有害なものなら、この提議は引込めるが、さうらしい様子もないので、銀座や新宿邊の街路樹に繁殖させたら、天然の裝飾にもなり且涼味百倍してよろしからうと思ふ。笑つちやいけない、山男の私が眞面目に考へてゐることだから。私の友達には山のルンベンが澤山ゐる。鷹の子捕り、岩茸採り、眞柏とり、蝮捕りなどは、大てい山のルンベンだ。大將方の勞働は、時によると命賭けの冒險であつて、鷹の巢などは、攀ちがたい絶壁の上にあるもんだから、鷹の子捕りは、摺鉢帽子をかぶつて、絶壁への岩登をする。正に山の鐵兜だが、こいつを冠らないと、巢を護る親鷹や、一家一門の鷹どもに、頭を突ツつかれる。鷹の嘴は人間の頭蓋骨を、鹽煎餅ぐらゐにししか考へてゐないのだ。バリバリ、孔をあけられて墜落粉砕、戦死を遂げる迂濶者もあるが、岩茸採りまたしかりで、空を刺す錐のやうな岩壁に攀ち登り、綱を命にブラリ下りながら、岩面に生えついてゐる岩茸をはぎ取るんだから、親譲りの生命はロハとしても、死んだときの葬式費用が入つてゐる。岩茸の安からざるゆゑんだ。



觀賞用の眞柏も物によつては高い。こいつめ。こゝまでおいで、といふやうな顔をしながら、嶮岨な場所に生えてゐるんだが、捜して歩くだけでも、日本の登山家などには出来ないだらうと思はれる命仕事だ。蝮捕りはすべて玄人がやる。私などの眼には見えない蝮の姿を、鼻で見つける。臭をかぎつけるんだ。蝮の頭を草の葉で押へたかと思ふと、クル／＼つゝんで、籠に投げ入れる。蝮の方では反抗どころか、呆氣にとられて文句をいふ隙もないほどの早業だ。蛇の習性を吞込んでをれば、恐るゝには足りないんだらうが、やり損なへば、痛い往生を遂げる。

いづれも都會ルンベンの仕事よりは危険能率が多い。都會ルンベンのなかに、公園のベンチを寢床にする者があるやうに、山ルンベンのなかに、谷川の岸や道端に湧く石だゝみの温泉、小屋掛けの天然風呂を、寢床に定めてゐる者がある。温度百度もあれば、木賃宿の煎餅布團よりも遙かに暖かく氣持がいい。

一日稼いで得た金を地酒に代へて裸になる。頭と足を湯槽のふちにかけて身を沈めたまゝ、星の光を浴びながら、夜が明けるまで、悠々と眠つてゐる。天下泰平の姿。羨ましい限りだが、なかに眠つたまゝ温泉の底に沈んじまひ、翌日は死體となつて浮いてゐるほど氣樂な者もある。これを「自分で湯灌する」と、山族たちはいうてゐる。自己湯灌だ。谷間の川の中に薪を積上げて、死體は焼かれ

るか、または土葬にされるのである。御連中のなかにはその土地で生れた者もあれば、渡り者もある。汽車の窓から投げ捨てられる汽車辨の、食ひ残しを拾つては食ひ、拾つては食ひつゝ、東京から鐵道線路づたひに、はる／＼テクつて來たなんていふやうな、都會の失業者もある。汽車の辨當は考へたもんだ。

かういふ種類のワンダー・フォゲルが、山の中に水力電氣の工事でもあると、そこに引掛かつて働くのである。山友達のなかには、山から山へ移動生活をして歩く炭焼もゐる。樵夫もゐる。これらの山族達と起居を共にするうち、いつしか自分もまた一個山男たるの資格がついたと思ふところあつて自慢にはならぬが、自分を呼ぶに、かくは山男の名を以てしてゐるのだが、今は都に出て來てゐる。



## 白衣の女

山奥のけぶる湯煙、谷間の流れ

四萬は湯どころ ぼのぼのと

明けかける四萬街道。墓谷十戸の夏の曉の静けさは、駐在所の戸を叩くあわたましい音に破られた。睡りからさめてゐた福田巡査は、はね起きて、表戸をくりあけた。戸口に突立つてゐるのは、色蒼ざめめた山賤で、常八といふ樵夫だつた。

「常かッ？」

「へい、旦那。てえ、大變なことが起つた。積善寺の和尚さんが殺されてるだア。」

「何ッ？」

「咽喉笛をえぐられて、おツ死んでる！」

「た、田村さんがかッ？」

「へい。お寺ぢやア大騒ぎでがす。」

「よしッ、お前も来いッ。」

福田巡査は、寝巻のままで、草履を突つかけると、戸口はあけつばなし、四萬川本流の吾妻橋を、飛ぶやうに、不動澤の坂道を急ぎ足で登るのでつたが、心の平靜も、顔の色もなかつたのである。

情死や、自殺は、温泉につきものだが、温泉場から一里離れてゐるだけで、こゝは、眠れるがごとき平和郷だ。血腥い悶着はもとより、泥坊沙汰も、かつて聞いたことがないのに、かりそめにも、衆生済度の和尚さんが殺されたといふのだから、墓谷部落にとつては、驚くべき大事件に違ひないのだ。

福田巡査は、息をはづませながら訊いた。

「和尚が殺されてゐるのを、どうして知つたのか？」

「俺と、市兵衛と二人で、今朝早くお寺に行つたら、和尚さん、おツ死んでゐたんだ。旦那のところには、すぐに届けを出した筈だから、知つてゐなさるだらう。市兵衛の娘のお杉が、昨日病死したことは？」

「あゝ、あれか。知つてゐる。」

「あの娘の死骸が棺桶に祀めて、お寺に昇ぎこんだのが、昨夕の六時頃で、本堂の中央に棺桶を据ゑ



つける、燈明を上げたり、花や線香を立てたりして、和尚さんに挨拶ぶつてから、俺と市兵衛は家へ歸つたが、死骸は一晩だけ阿彌陀如來の膝元に預けといて、翌朝、和尚さんにお経讀んでもらつて、お天道様の出ないうちに、墓の土埋けるのが、このへんの習俗だから、今朝早く、又、俺と市兵衛と二人づれで、お寺へ出かけたところが、俺たちの來るのを、袈裟かけて待つてゐる筈の和尚さんが、夜明けも知らずに寝過してゐるのか、庫裡の戸もあいちやめねえ。外から引きあけようとしたがあかねえんだ……おゝい、和尚さん。お葬えだよ。起きてくらッせえと呼ばはつて、ドンドン叩くんだが、シーンと静まりかへつてゐる。和尚さんは評判の早起きだが、どうしたんだらう？ 昨夕は、暗いうちに起きて、埋葬の仕度をして待つてゐるなんて、言つといて、お天道様もそろそろお顔出しにならうといふのに、仕様がねえなア。市兵衛どん、和尚さんが怒つたつて構はねえから、入りこんで起さうぢやないかと、俺が言つた。ぢや、さうすべえよといふわけで、入りこむ穴はないかと思ひながら、お寺の周圍をグルツと廻つたところが、本堂脇の雨戸が、半分ほどあいてゐる。」

「ふむ！」

「昨夜は蒸暑かつたんで、小僧め、あけて寝てやがるんだらうと思つた。」

「ふむ！ 小僧といふのは、十八九のニキビ面だな？」

「違えねえ。奴は、和尚さんの遠縁の者で、生れはこの村だが、十四の歳から女郎買ひの組だ。尻くせも、手癖もよくねえんで、親兄弟がもてあまして、小僧にしちまつたといふ話です。お寺に預けられてから、まだ一ヶ月とはたたねえやうだ。本堂は、あの野郎の寝場所なんで……おいおい、小僧どん。いつまで寝てるんだ。早く起きてくれやいと、聲をかけながら、雨戸のあいてるところから、二人で本堂へ入りこむと、ハア、小僧の寢床は、お杉の棺桶の前に敷ツばなしで、藻ぬけの殻だ。」

「ふむ！ めないのか？」

「へい。見當らねえから、俺と市兵衛は、本堂を通りぬけて、仕切りの板襖を、ソツと、庫裡の座敷を覗いたです。薄暗くつて、ちよいとは知れなかつたが、いや、おツ魂消たの何のと、腰をぬかすところだつたよ。血達磨だ。蒲團の上に手足を突ツ張つて、おツ死んでるぢやないか！ こりやア大變！ 埋葬のだんぢやねえぞ。ハア、大急ぎで駐在所に報せなくつちや、いけねえつてんで、市兵衛を置いて、駈けつけたやうなわけです。」

「ふうむ。和尚は殺されたといふことが、どうしてわかつたのか？」

「そりや、死骸のそばに刃物がないから、自殺ぢやないことア、一目で知れるだよ。」

と、常八は、息を切らして言ふのだつた。



巡查と樵夫は、不動の瀧の下流にのぞむ小高い崖の上に出た。二井山積善寺は、そこにあるのだ。享保年間開基の古刹だが、度々の失火に、大伽藍も、鐘樓も焼け落ち、崩れかけの山門、本堂、庫裡、臺所だけが轟々たる老杉のなかに残つてゐる。

住職の田村蘇雲(四十八)と、新參小僧の木根梅次(十九)の二人ぐらし。女といへば、寺下から炊事に通つて来る百姓の婆さんきり。寂しい世帯ではあるが、村の檀家に、四萬温泉といふ盛り場があつて、そのはうからの収入で、酒も飲めるし、肉も食へるのだから、山寺の生活としては、ゆとりのあるはうだらうといふやうな噂。

福田巡查と、樵夫の常八が、山門から入つて行くと、市兵衛爺さんと、飯炊き婆さん夫婦が飛び出して来て、挨拶をした。これは、常八が駐在所へ行きがけに、和尚の變死を報せたので、来てゐたのだ。

市兵衛爺さんは、娘の埋葬ができず、途方に暮れてゐる様子だが、婆さんはガタガタ慄へてゐる。

福田巡查は、慘劇の行はれた庫裡の座敷へ上りこんだ。

暗いので、雨戸を一枚あけたが、今まで締切られてゐたので、部屋のなかに充滿してゐる血腥い臭ひが、鼻をつくばかりにひどい。よほど苦悶した揚句、絶命したものか、蘇雲和尚の死態は、二目と

見られぬほど物凄かつた。

床の間を枕にした夏蒲團の血の池に、仰向いて、轉がつてゐる豚のやうな肥ツちよの和尚は、齒を喰ひ縛り、クワツと兩眼を見ひらき、虚空を掴んでゐるのだ。

禪一つの裸なので、頭から足の先まで血に染んでゐる。細かに檢べると、鐵の爪で引捲り、抉りつたやうな恐ろしい傷が、顔、頸、手、胸、腹、股にわたつて二十五六ヶ所もある。

致命傷は咽喉部の大疵らしく、慘劇が演ぜられてから三時間とは経つてゐないことや、犯行に用ひられた兇器が、短刀や、刀のやうに鋭利なものでないことや、被害者が激しい抵抗を試みたことは、全身にわたる柘榴のやうな生々しい傷口が、雄辯に物語つてゐるのだ。

怨みの殺人か？ 強盜の所爲か——福田巡查は、この慘虐な兇行に、言ひやうのない戦慄を覚えながら、年寄たちが震へすくんでゐる臺所へ戻つた。

下手人は、よほどのしたゝか者に違ひない。敷蒲團や、疊も血だらけなのに、曲者は足形一つ、指痕一つ残してゐない。拭きとつて去つたやうな形跡はないからな。

「ハア、さうでがすかねえ。私ア不思議でならねえだよ。此寺の飯炊きしてゐるから、大抵のことは知つてゐるが、人に怨みをうけるやうなことをなさる氣遣えは更にねえ、親切一方の和尚様が、どう



して、あゝ無残な目にあひなさつたか、わけがわからねえだ。」

「ふうむ！ 婆さんの役目は、飯炊きだけかい？」

「いゝや、金銭の出入れも、買物も、雑用は、大抵私が頼まれてしますだよ。」

「さうか。寺には、幾らぐらひの現金が置いてあるのか？」

「いつも、五六十圓だね。お盆中は別だけど……」

「その現金の置場所は？」

「お座敷の机の抽斗さ皮財布があるだが、それに、藏つてあるです。」

「その皮財布を、見せてくれ。」

「ハア、さうかね？ 私の物ぢやアないから、私の自由にはならねえが、旦那が見せると言ひなさるんだから、持ち出してもよかんべえ……なア、爺様。濟まねえけど、お座敷へ行つて、皮財布を取つて來らツさいよ。私アおつかなくて、奥には入れねえだから。」

「氣味の悪い使ひだな。」

婆さんの亭主は、屍體の部屋に向つたが、黒革の財布を片手に飛び出して來た時の鐵面には、容易ならぬ恐怖の色が漲つてゐた。

「か、か、金は、一錢も入つてねえぞツ。」

「えゝツ、馬鹿なことを言はツしやい！ 私が眼で見て、知つてゐる！ 昨日の朝まで、五十圓ばかり確しかに入つてたんだ。それから、一錢も費ふ用はなかつたんだから、ない筈はない！」

「ない筈はないツたつて、ないものはない！ それ、この通りだ！」

爺さんが、空財布の口をあけて、逆さまに振るのを、みんなは驚愕の眼で見た。

「盗人にやられたんだ！」

「まあ！」

「ふむ！ その皮財布に金が入つてるといふことは、小僧も、知つてゐたらうな」

「ハア。何遍も見てるんだから……」

「さうか……和尚さんは殺されてゐる、金は盗まれてゐる。小僧はゐなくなつてゐる。ふん！ 梅次といふ男は、手癖の悪い性質ださうだな。」

「旦那は、梅次どんが和尚様を殺して、金を持つて逃げたとでも、思はツしやるのか。爺さんは狼狽の體。」

「梅次は、お前の身よりか？」



「お前さんは、このお寺に、どんな大事が起つたか、知つてゐなされるかい？」

「知、知つてゐます。」

「何ッ、知つてゐるツ？」

「はい。」と、眞蒼な顔！

怯えきつた眼！ わななく唇！ 何かは知らぬが、非常に恐怖に囚はれてゐるらしい梅次の、その

腕を、ムヅと引ツ摺んだ福田巡査、

「青二才のくせに、大それたことをしやがる！ 貴様は田村和尚を惨殺し、黒革財布の金を持ち逃げ

する途中、あわて過ぎて、空井戸に落ちたんだなッ。盗んだ金で、温泉場の女と出奔する氣だつたら

う。それはわかつてゐるが、兇行に用ひた刃物は何だ？ 鐵の爪でえぐつたやうな、あの酷い傷は何

でつけたッ。」

「そ、そ、そんなこと、僕は知りません。とんでもない誤解です！」

「ぢや、なぜ逃げたんだッ？」

「怖くて怖くて、あたゝまらなかつたから、逃げました。あゝ、思ひ出すと、身の毛がよだちます。」

「何が怖かつた？」

「強盗か？」

と、爺さんが口を出した。

「いゝえ。そんなものぢやないんです。」

「何ぢや？」

「は、は、話をいたします。今朝の三時頃でしたか、枕元から、氷のやうに冷い風が流れこむやうな氣がして、ふつと眼が覺めました。白状しますが、棺桶のそばで、たつた一人で寝るのは、はじめてのせめか、氣味が悪くて仕様がないうんですけど、死んだ人間が、棺桶の中から出てきて食ひつきやすまいと思ひながら、我慢をして寝たやうなわけで……眼をさますと、須彌壇の前に置いてあるお杉さんとやらの、棺桶が氣になつて、なるべく見ないやうに、努めれば努めるほど、僕の眼は棺桶のはうを向くんです。いやだなア、早く夜が明ければいゝがなアと、思つてると、棺桶の蓋は釘づけになつてゐるから、開く筈はないのに、下から突きあげるやうに、音もなくスウと宙に浮いて、棺の中から白衣の女がぬツと立ち上つた！」

「ほ、ほ、ほんとうかッ。」

と、眼の色を變へたのは市兵衛だ。



「いゝや、俺が孫の友達でがすよ。」

「この際、寺にゐなければ、嫌疑がかゝつても、仕方があるまい。何のために、逃げるんだ。」

「俺の考へぢや、眞夜中に眼を覺すと、強盜が押し入つて大騒ぎをやつてるんで、怖くなつて、逃げたんぢやないかと思ふんだが……」

「そんなら、眞直に駐在所へ訴へに来さうなもんだ。それもしないで、今に到るまで、どこへ行つたんだか分らんのだから、姿を隠したものとしか思はれんぢやないか。梅次を捕へたら、この事件は解決する！」

「ふうむ！」

爺さんは詰つた。

二人の若者が、裏口から駈けこんで来たのは、この時である。一人は、爺さんの孫の彌作で、一人は寢巻姿の小僧の梅次だつた。皆なが、アツといつて眼をみはる。爺さんは轉げ出した。

「おゝ、彌作。見つかつたかツ。」

「うん。」

「梅次どんは、どこにゐたんだ？」

「寺の中よ。」

「寺の中つて？」

「うん。裏の空井戸に落つこつてたんだ。梅次さんを捜して来いと、お祖父さんが言つたから、捜しに出ることは出たけど、見當がつかねえから、裏の庭をうろろしてると、あの空井戸の底のはうで、ガサガサ音がするんだ。おやツと思つて、上からのぞいて見ると、草でかぶさつて、ハッキリ分らないが、何だか、白いものが底のはうで動いてるから、オーイと聲をかけると、オーイと下から返事が来た。手前は誰だツと言ふと、僕は梅次です。助けてくれいツていふ聲が、確かに梅次さんだから驚いた。俺ア家へ駈けもどつて、繩ア持ち出して、ヤツとのことで引揚げたんだが、ありやア危ねえ空井戸だな。」

「ふうむ。何だつて、空井戸なんかに落つこつたか知らねえが、よくも怪我をしなかつたもんだな。梅どん。」

「は、はい。足の踝を挫いただけです。」

「無事でよかつたが、お前さんの姿が見えねえんで、どんなに心配ぶつたか知れねえ。」  
「申譯がありません。」



「はい、誓つて嘘は申しません。」

「夢ぢやあるめえなツ。」

「眞實！ 神経の作用や、眼の迷ひぢやアないのです。僕は、死んだお杉さんとやらを見たことがないから、知らないけれど、その顔は緑青のやうに青く、骨と皮ばかりに瘦せ衰へ、頬骨などは、嘴のやうに飛び出して、髪はおどろです。落ち窪んだ眼を据えて、四邊をジツと見まはす形相の恐ろしさつたらありません。蒲團を被つて震へながら、様子を窺つてゐると、白衣の女は、棺桶から脱け出して、庫裡のはうへ歩き出しました。歩きたびに、ガラガラ、ガラガラと、骨の鳴り軋む音まで聞えしました。女の姿が、庫裡の座敷に消えたかと思ふ瞬間、ウワアツ、助けてくれツと、さういふ和尚さんの悲鳴！ 絶叫！ 呻き！ 唸り！ のた打ち廻り、暴れ狂ふ物音！ それがバツタリ止んで、静かになると、ガラガラ、ガラガラと骨の鳴る音がして、白衣の女が、座敷から本堂へ戻つてきました。顔から白衣にかけて眞つ赤です。薄明りでも、ハツキリ浮き出て見えました。口は耳まで裂けてるやうで、手も袖も、血糊がべつとり、その物凄さは、一生忘れることができないでせう。慄え縮んでゐた僕は、もう堪らなくなつたんで、跳ね起きさま、雨戸を蹴あけて堂外へ飛び出し、無我無中で逃げるはづみに、草深く目にはつかぬし、氣は顛倒してゐるし、足を外して空井戸へ落ちました。氣

を失つたまま、落葉の上に寝てゐたんです。」

梅次は、頭から水を浴びせられたやうに、ブルツと身慄ひした。

苦り切つたのは、福田巡査だ。

「ふゝん！ 田村和尚の殺害者は、亡者だつたのか？ 幽霊に喰ひ殺されるなんて、珍説だが、その筆法で行くと、皮財布のなかの金も、幽霊が盗んだんだらう？」

「金のことは知りませんが、昨夕、お杉さんの棺桶を運んで来たこの人たち二人が引取ると、すぐ和尚さんは、皮財布を懐中に、温泉場へ行くといつて出られ、夜おそく酒に酔つて歸られましたから、金は、女にでもおやりなすつたんでせうよ。」

「女とは？」

「和尚さんの圍妾です。」

「えツ。田村和尚には、圍妾があつたのかツ。」

「はあ。かうなれば、隠しだてもできませんから、和尚さんにはすまないけど、打明けて申します。寶屋のお菊といふ温泉場の、女中あがりです。失くなつたと仰言る金の一件については、お杉さんの幽霊や、僕なんかに嫌疑をかけるより、お菊をお調べなすつたはうが、早道です。」



意外！ 蘇雲和尚に女があるなんて、飯炊き婆さんも知らなかつたか、驚きあきれた顔つきだ。腕組みをして、考へこんでゐたお杉の父市兵衛が、へん！ 人は見かけによらぬもんぢやて。悪い隠しことは、きつと、どこかでバレる——と、竈の後ろの壁にかゝつてゐる鐵槌兼釘抜きを取つて、立上つたかと思ふと、廊下づたひに本堂へ急ぎ足。皆なは顔を見合つてゐたが、

「何しに、行つたんだらうなア？」

「行つて見べえや。」

心配しながら、ぞろぞろと本堂へ入つて行つた時には、市兵衛爺つあんは、空樽利用の、棺桶の蓋の掛け繩を外してゐた。

「やア、お前、氣でも狂つたかツ。」

「いゝや、梅次の話が心がかりぢや。退けツ。」

止めようとする常八を押しつけて、頑丈に釘づけしてある蓋を、釘抜きで、メリメリとコヂあけた。窮屈な樽の中へ、無理に押し籠められてゐた死女の頭が、一二寸棺外へ飛び出した。

「うわあッ！」

巡查も、梅次も、常八も、婆さん夫婦も、驚愕のあまりに叫んだ。

奇怪！ 骨と皮ばかりに瘦せ衰へたお杉の死顔は、ドス黒い血汐に染つて、物凄いと、恐ろしいとも言ひやうのないほど醜怪に見え、手の指の爪の間には、脂じんだ人間の皮が附着してをり、口中に詰つてゐるらしい大小二片の肉が、喰ひ縛つた齒と齒の間からハミ出てゐる。

やがて、常八を顧みて、暗然と呟いたのは市兵衛だ。

「梅次どんの話は嘘でない。和尚さんを喰ひ殺したのは、お杉の怨念ぢや。」

「うゝむ！ これで、お杉の恨みも晴れて、浮ばれやう。駐在所の旦那！ お前様は不思議に思はつしやるだらうが、この亡者も、温泉場で働いてゐる頃は、和尚さんの手生の花でがしたが、不治の肺症にとりつかれて、寝こんでしまふと、いや氣がさしたか、穿き古しの草鞋を捨ててやうに棄ててしまつて、寶屋のお菊といふ女を圍妾にしたんでがす。お杉は、息を引取る間際まで、和尚さんの無情を恨みぬいてゐたが、人の一念は恐ろしい。この通りだからな。」

さういつて、常八は、血塗れの死女に合掌念佛した。



## 吹雪に踊る人々

上越國境の山を背負うたS温泉は、三十幾年ぶりの酷烈な寒威に脅かされてゐる。生々しいバラツク浴場の板壁の隙間から襲ひかかる零下十度の寒氣には、流しの板敷も、硝子で張詰めたやうに凍りつき、天井から垂れ落ちる湯氣の凝滴も、顛ひつくほど冷たい。湯小屋の外は吹雪だ。山は眞白く煙り、溪流から落ちる瀧の水は凍結して、白銀の蛟龍が昇天するやうな豪怪な形の大氷柱と化したまゝ、溪壁に重なり懸つてゐる。溪岸から登りになる道は、勾配の急な坂で、雪袴を佩いた女達が、十人二十人と、掛聲勇ましく、山から伐出された杉材をかついで登つて来る。杉材はこの温泉場でトラツクに積込んで、N町へ出すのだ。

いつもならば炬燵に囃りついてゐる女達なのだが、去秋の大水害に、畑地、家屋、人畜の多くを洗ひ流されて、山間貧農の原始的な村民は衣食の道を奪はれ、饑餓線上に追詰められたのであるが、絶望はしなかつた。他郷へ出稼ぐ術を知らぬ彼女達の夫や親兄弟は、樵夫となり、炭焼となり、護岸工

事の人夫となつて、血路をひらいてゐる。

村としては、前代未聞の天災に見舞はれたんだから、精神的にも激動を蒙つてゐるだらうし、物質的にも殆ど總てを失つたというてもよからうと思ふのだが、そのなかにあつて、失はず棄てず、固く守つてゐるものがあるならば、年中行事と宗教的古式とがそれだ。生きることと全力をあげて、他を顧みる暇もない彼等男女でありながら、廢めたがいと思はれるほど、愚にもつかぬことを、次から次と几帳面に實行するんだから、傳統の力は恐ろしい。

吹雪の中の杉材運搬を終へた女達が、冷え疲れた體を、彼女等の陋屋の爐端に休める灯ともし頃だ。バラツクの温泉に浸りながら、屋外の景色を眺めてゐると、どれもこれも鄙びた晴着に、顔まで白く粧ひした少女の一隊が、楽しげに笑ひさゞめきながら、荒れ狂ふ雪を衝いて、坂道を登つてゆく。一隊につゞいてまた一隊。

私の側で湯に茹つてゐる村の老人に、私はきいた。

「あの娘達はどこへゆくんだらう？」

「今夜は天神籠りだ。」

といふ。少女達は部落外の天神社に籠つて、この雪の一夜を語り明し、踊り明すのださうだ。湯か



ら出たところで、筋向ひのM屋といふ宿の帳場を覗いて見たら、晝間は道路の雪掻きが仕事である少年達が、大勢集まつて、わいわい騒ぎながら、お互ひの顔を墨で真黒く塗りつぶしてゐるのだ。驚いた私は少年の一人をとらへて訊いた。

「君達は何をしてゐるのか？」

「天神籠りの支度だよ。」

「君達もか？」

「あゝ。真夜中の二時に起きてゆくんだよ。それまで、こゝで皆一緒に寝るんだ。」

「ふうん。顔に墨を塗るのはどういふ譯か？」

「そりやア、かうして置けば誰が誰だか、女の子には見境がつかねえだらう。そこが面白いんだよ。」

「はゝあ。見物にゆかうか。」

「駄目だよ。大人は来ちやいけねえんだ。」と笑つてゐる。

この温泉場に、こんな奇風があることは、今まで知らなから、何のための行事か？ 目的を尋ねると、戦争に勝つためだとか、手が上るためだとかいふ。人里離れた吹雪の中の籠り堂で、粧ひの少女達を相手に、夜つびて亂舞する黒面少年達の姿こそは、世にも奇怪なものだらう。

隣村の水上市あたりでは、生の鶏卵が石のやうに凍つたといふが、私の假寓する此のS村でも、温泉から出たての手拭が棒になるほどの厳しさだ。天神籠りからの吹雪で騒々唸つてゐる。唸をあげて雨戸や板壁に吹きつける物凄しい音を、宿の爐端で聞いてゐると、私の眼には、悲惨な幻影が浮び出るのだ。傳説か事實かは知らぬが、悲劇の跡といはれる一叢の竹藪が今もあつて、此處だと言ひ傳へられ固く信じられてゐる説話だが、わがS村から四キロの街道下、湯原の竹藪の畔に、以前は温泉が湧いてゐたらしく、現在そこにある湯本一家の先祖源兵衛なる者が、温泉宿を営んでゐたといふ。この宿屋に、お澤お酉といふ二人の若い湯女が抱へられてゐたが、主人源兵衛の酷使虐待を恨み呪ひ、心ひそかに復讐を誓つてゐると、機會はやつて來た。

勤め辛さに抱合つて泣いてゐる彼女達を怪しんで、事情をきいたのが、泊り客の行脚僧だつた。彼女達は主人源兵衛の苛酷無情を訴へ、命にかへても復讐したく思つてゐるのだと言つた。彼女等の哀れな身の上に、いたく同情した行脚僧は、それほど復讐したければ、おん身等が願ひの叶ふ秘法を授けてやらう。死馬の骨を温泉の湧き口に投げ込めよ。湯は立ちどころに飛ぶだらう、と言つて立去つた。狂喜したお澤お酉は、その夜付近の馬塚を發いて、死馬の脚骨を持ち歸り、宿の者の目を盗んで温泉の湧き口へ投げ込んだ。果せる哉。轟々たる噴湯はピツタリ止つた。



馬骨の靈驗は知らぬが、天變地異によつて起る、かやうな自然現象を、湯が飛ぶと稱して、温泉業者が怖れてゐるのは、昔も今も變りはない。家の中の出来事ではあるし、この大變事が、暫くでも發覺せずにあるわけはない。運悪くも直ぐに知れて大騒ぎとなり、事の成就を見すまして、逃げ支度にかゝるところを、彼女達は主人源兵衛に怪しみ捕はれた。枯渴した湯の湧口からは、馬の脚骨があらはれる。こいつの成す業に違ひないとあつて、一途にお澤お西を責めた。舊正月（二月）十四日の吹雪の夜。怒り猛る源兵衛は、番頭銀十に命じて、裸にした二人の湯女を太繩で縛り上げ、吹雪の街道に引摺り出して、件の馬の脚骨で滅多打ちに叩きのめした擧句、無残にも殺してしまつた。

誰が何處で見てゐたか、湯女殺しの慘劇は、忽ちのうちに村中へ知れ渡り、次いで湯の飛んだこともわかつた。……下手人の銀十は後で村拂ひにされたが……湯原の湯が飛ぶと同時に、これまでは湯の氣もなかつたS村の崖腹から旺んな勢ひで熱湯噴出し村民を驚喜亂舞させてゐるといふ飛報が、四方に傳はつた。これが今の温泉の由來だが、米も麥も芋も穫れない寒村が、一朝にして温泉場になつたのも、馬の骨のお蔭だとあつて、氏神たる神社の御神體は「馬」だ。御神體に憚りありと稱して、荷馬などの通過を禁じたことさへある。冬の雪の日の行事「鳥追」には銀十追放の唄を唱ふ。

谷間の雪に、月光牙を渡る夜半などは、夜獸の奇聲に驚かされることもある。狐が友を呼ぶのだ。背戸口にひそやかた音を立てる生きものゝ氣配を感じることもある。狸が餌を獵るのだ。狐も狸も近頃は毎夜のやうに、私の宿近くまで彷彿来る。炬燵蒲團の中で、その聲その音を聽いてゐると、いゝ／＼のことが頭に浮ぶのである。このS温泉に遠からぬN町やH町その他では、狸の飼育を始める家が、日増しに殖えて行き、H大學村に近い裏淺間の一村では、可なり大規模の養狐場さへ出来て、狐狸飼育流行の兆を見せてゐるの觀があるのは、猫も杓子も毛皮の襟巻に毛皮の外套だ。冬春かけて流行の王座を占めてゐるといふ狐類の毛皮が、高價に賣買されるからだらうが、私の住むS村では、それを承知で狐狸には手を出さぬ。

鶏や鯉を盗む彼等は害獸だし、良獲に困難を感じるわけでもないのだから、一舉兩得に片ツ端から捕獲するやうに力説するのだが、儲かるとわかつてゐる仕事でも、先祖の知らぬ商賣には顔をそむけて、支那の苦力も逃出すやうな、慘憺たる勞働に身を委ね、壯烈な貧乏をしてゐる、かと思ふと、毎年春になると、張子の招き猫や片目達磨を、遠方の寺々から買求めては、鹿爪らしく飾つたり、家中に鼠の放牧と繁殖を試みては、所嫌はず喰破られ噛り潰されながらも、大黒天の御入來を待つてゐる家があるんだから、貧乏を喜ばないのは勿論。一ヶ年の生活費が六十圓……月に五圓……は上の部



といふ。

金八十銭の家賃で、ちよいと住める家もあるぐらゐで、生活程度の低さ加減は想像出来るだらうが……それにしても、中級以下の生活はなつてゐないのだから、結構面白かるべき道理はないのだ。舊家のなかには、先祖傳來の家賃——高野長英や小野蘭山や佐久間象山などが、置土産にして去つた書き物——を手放すべく用意する家もある程だ。何が故に積極的な運命開拓を試みないのか？ 情性にも由るだらう。貧乏桃源に偷安の夢を食つて來た情性は、犠牲の多い革新を希望しまい。幾百か幾千年の傳統に生きる彼等は、限られた見聞と經驗の範圍外の總てに、本能的の忌厭と恐怖を感じるのだ。無智安逸な原始的貧農生活を送つた祖先の軌道から外れることを好まないのは、未開人に見る通有性ではないのか？

かくてS村の生命であるバラツク温泉の世話役達は、お隣りの水上、法師、笹ノ湯、伊香保、四萬草津、川原湯などの繁昌ぶりを羨望しながら、敢て外客の誘引策を講じようとはしない。宣傳ポスターはおろか、案内書もエハガキもないのだから、世には知られず、客はなしで愈々立ちゆかぬ。そこで地元の小農民から、一回金二銭の入浴料金を徴發し始めた。稗や粟を食つてゐる百姓衆を垢だらけにして置くといふ哀れなナンセンスの最中に、襲來したのが昨秋の山津波で、温泉場は半ば潰滅に歸

したのである。私などは其とき死にそこなつた一人だが、何が幸ひとなるかわからない。村民の心境はこの天災によつて一變し、長夜の惰眠から濶然として覺めたのである。こゝにN大學村建設の議が決定した。新興氣分の彼等に取つて、毒にも藥にもならぬ行事は、貧乏と多忙の中にも營まれる。あゝ。狐狸を捕る日はまだ遠い。



## 狐を飼ふ兄妹

## 一

上越國境の残雪が、壯麗な淺春の夕陽に、燦爛と照り映ゆる時刻であつた。馬の脊は稻包山の南尾根尻、摩耶の奥谷を抱く撫平の山小屋では、筒袖山袴の少女……お悦が燃えしきる爐端に胡坐をかいて、遠雷のやうな雪崩の音を聞きながら、藥草の撰り分けをしてゐた。時折り彼女の眼は、土間の隅に走つた。土間の片隅の素麵箱には、薄い焦茶いろの頬白の小ツぼけな仔狐が、麻繩でくゝられ躑まつてゐた。この狐のチビは、誰が仕掛けたとも知れぬ兎毘に掛つてゐたのを、お悦の兄……莊太郎が捕へて來て、二日前から飼つてゐるのだ。莊太郎はこの山小屋から一里の澤渡温泉場へ、搾り立ての山羊の乳を、日に二度づつ配達するのが商賣である。十九歳の若者らしい元氣さで、温泉場から莊太郎が戻つて來たのは、黄昏時だつた。

「悦ちゃん。俺ア素晴らしいことを聞いて來たぞ。」

「何さ。素晴らしいことつて？」

「金儲けの話だ！」

「金儲け？」

思はぬことに、お悦は仕事の手をやめて、兄の顔を見つめた。莊太郎の眼は、溢れるばかりの喜びに生々いきくと耀かやいてゐる。

「うん。誰に聞いたか知らないが、摩耶の瀧澤の近傍で、狐を捕へたさうだが、眞個ほんどかつて、觀水閣の大將がいふから……ハア、狐の赤ン坊を捕へました……つていふとね……何だ、赤ン坊か。赤ン坊ぢや値ねにならねえ。大きい奴やつだと、三十圓から五十圓に賣れる……つてよ。」

「うん。」

「まさか！」

「や！眞個ほんどだよ！赤ン坊ぢや値ねにならないけど、赤ン坊が迂路うろちついでゐるところを見ると、あの邊には、きつと親狐の巢穴あながあるに違ひないつてんだ。親狐を捕へたら、賣つてやる。狐や川獺かはとの賣う買ちする人を知つてゐるから、その人に賣つてやるが、どうだ、巢穴あなを見つけて、狐狩きつねりをする氣はない



かつてんだらう？……ハア。願つてもない金儲けだ。さういふわけなら、どしどし取ッ捕へるから、賣つておくんさい、といつて俺頼んで来たんだ。」

「まあ、驚いた。白狐か黒狐なら、そら、珍らしいから、見世物にでもなるでせうが、あんな赤ツばい野狐を、そんな高値で買つて、どうするんでせう？」

「毛皮をとるんだとさ。あの毛皮で外國人の襟巻やら外套をつくるんださうだ。山出しの奴からして三十圓も五十圓もするんだから、ちやんと拵へ上げた品物なんか、よッほどの値段だらう。外國人の奥さんや、お嬢さん方が買つて着るんだなア。」

ぐらゐのことしか知らない。それもホンの先刻、温泉宿の主人に聞いて知つたばかりだ。熊の毛皮は金になる。羚羊や山犬の毛皮は坐蒲團にするが、鶏泥坊の狐の毛皮なんか、三儀法師の代用にしかないんだ。それが外國人の襟巻や外套になるといふんだから、お悦にとつては、少なからぬ驚異だつた。汽車も電車も見たことはなく、國民學校にすらいかぬ男女の多い山奥に育つた、お駒草のやうな少女には、お稻荷さんの使ひ姫の毛衣が、華やかな異國の大都會の、流行の大浪に乗つて、容色美しい淑女たちの頸に巻かれ、香高い玉の肌を包んでゐるといふことも、嘘のやうに思はれるだらう。

野狐の毛皮の、山値が三十圓、五十圓よりか、實際はもつと高いことを、莊太郎は知らずに喜んで

ゐるのだ。

「あの素麴箱の中のチビも、大きくなつたら賣るつもりだが、なア、悦公、俺ア明日から狐狩りにゆくぜ。いゝか。狐の奴、見つけ次第にフン捕へて、賣つちまはア。こんな金儲けが、山の中に滅多にあるもんか。あはゝ。俺ア念願の鐵砲が買へるぞ。獵人になれるぞ。赤澤山で見つけた熊なんかも、鐵砲さへありやア、俺のものになつてたんだがなア。鐵砲さへ持つてりやこんな貧乏はしないんだ。」

「でもねえ。兄ちゃん。狐なんて、そんなに易々と捕れるもんぢやないわ。」

「なあに大丈夫！ 巢穴を見つけて、罠で捕らア。」

「そんなこと、大きな聲で喋つてゝいゝの？ 何處にかくれてゐて、聽いてゐるか知れない狐の耳にでも入つたら、あべこべに何んな酷い悪さをされるか知れない。狐は靈性の魔物といふからね。およしなさいよ。」

「馬鹿いつてらア。金が欲しい、金が欲しいつて、口癖みたいに言ふくせに！」

「そら、お金は欲しいけど、殺生までして持ちたかないわ。鐵砲はまた他に買ふ手段もあるでせうか、狐狩りはやめたがいゝわよ。勘藏さんの前例もあるぢやないの。あたし怖いわ。」

お悦は怯えた表情で異議を唱へた。勘藏といふのは、こゝから西三里ばかりの、入山部落の獵師で



ある。つい先頃のこと、白黒斑の珍らしい貉……その實は狐だつたらしい……を山の中で見て撃ち損じ、さんざん追ひまわした揚句、取り逃がしてしまつたのである。ところがその翌朝、起出して見ると、家の周圍に貉の糞が點々と落ちてゐる。眞夜中に貉がやつて來ては、家の周圍を徘徊するらしく毎朝、新らしい糞が落ちてゐるのだ。獵師勘藏はたゞ不思議に思ふばかりだつたが、これは確かに不吉な前兆だつた。不可解な狐の行動が始まつてから三十一日目に、四歳になる勘藏の子どもが行衛不明になつた。勘藏が山稼ぎの留守に、家の裏口で洗濯してゐた婆さん、ふと氣がつくと、戸口で遊んでゐる筈の子どもがゐない。そこらを捜してもゐない。部落中……といつても、戸數僅かに十軒餘……を尋ね歩いたがゐないので、大騒ぎとなり、部落の若者たち總出の搜索となつたが、子どもの姿はもとより影も見當らんだ。この上は神力を借りるより他に法はないといふわけで、この山間では、生神様のやうに崇め尊ばれてゐる小代部落……淺間山の裏高原、六里ヶ原の一角、川村女學院や法制大學村のある……「小代の天狗」といふ豫言者に占つて貰ふと、その子どもは、部落の南方、長笹川溪谷二里の上流右岸にある巨きな老櫓の洞の中で死んでゐるといふ。部落の若者たちは足ごしらへ嚴重にこの峻嶮な谷を、告げられた場所まで溯つた。おゝ！一本の亭々たる巨櫓が、そこに翼をひろげて空を衝いてゐるではないか！正にその喬木の空洞に、哀れな子どもは、打伏せる死體となつて發

見されたのである。死體のそばの濕土に、點々として印されてゐたのは、大きな狐の蹠跡であつた。倔強な山男でも、おいそれとは踏み込めない峻谷に、四歳の子どもが、どうして、また、何の用があつて入り込んだのか？ 獵師勘藏が白黒斑紋の貉……實は狐……を撃ち損つた事實を知つてゐる部落の人達は、死體のそばの狐の蹠跡を見ると、サテハと思つた。疑問は直ぐ解けた。射殺されようとした狐が、復讐するために、子どもを拉つて、こゝまで連れ込んだ……といふことに決つた……この山間には、こんな神祕な出來事が幾らもある。お悦は兄の狐狩りを止めさせるつもりで、この事件を出したのだつたが、若馬のやうに剽悍な莊太郎は、妹の心配を笑ひ飛ばしてしまつた。

「はゝゝ。氣の小さい女だなア。」  
「あら、さうぢやないわよ。」

お悦には、そんな迷信や祟りを怖れる以上の理由があるのだつた。兄には祕してゐるのだが、實をいふと、彼の犠牲になるかも知れない狐……赤毛のチビの親狐……は、一昨日から二日續けて、莊太郎の留守を狙つては、この山小屋に姿を現はしてゐる！ 囚はれの我が子の所在を、鋭い感覺で嗅ぎつけて、逢ひに來るのだ！ お悦は爐端で見てゐたんだが、尻尾の太い赤毛の雌狐が、荒席の帷を垂れた小屋の戸口の闕に來て、チョココンと坐つた。この臆病な獸は、いかにも落ち着かぬ態度で、あた



りをキヨロ、キヨロと見廻したが、爐端の少女に少しの害心もないことを見ぬくと、憐憫を乞ふやうに瞬きもしながら、我が子のそばに匍ひ寄つて、乳をのましたのである。さうして、さも名残り惜しげに、振り返り振り返り、小屋の外へ去るのだつた。両親のないお悦には、それが堪らないほど可愛く、いぢらしかつた。その涙ぐましい光景を想ひ浮べると、決心せずにはゐられないのだ。

「あとで今一度、兄さんを説得して見よう！」

## 一一

「じめんなさん。」

女の聲が、山小屋の戸外にきこえて、荒蕪の帷を播分けながら、つと入つて来た者がある。黒紫の頭巾に薄茶色の法衣を纏ひ、脚絆に草鞋。竹杖をついてゐる五十がらみの比丘尼さんだ。日に焼けて色は浅黒いが、稟とした氣品のそなはつた容貌。女には珍らしく立派な格服だが、聲は流石に優し。

「通りがかりの女ぢやが、しばらく憩はせて貰へますまいか？ 私はこれから山越しに、越後六日町雲洞院へゆくもの。山路の旅には馴れてゐるし、道は一筋、迷ひはせぬが、残雪深く、歩くに骨

が折れますわい。これから上も雪でござんせうな？」

「はう。」

「掛けさせて下され。」

「どうぞ。こちら、爐端へおいでなさいませ。」

櫓をへし折つては、その中にくべてゐたお悦は、坐り直して容を改めた。上越國境を越える修験者山法師、尼僧が此の邊を通ることは滅多にないので、お悦は奇異に思ひながらも、佛の道を通る人への、敬虔な心を見せることは忘れなかつた。比丘尼さんは框に腰かけたかと思ふと、土間の隅をチラと見た。

「ほう！ あの箱の中は、狐の子ぢやな？」

「はう。」

「何と、まあ、可愛い顔をしてゐる！」

「ほう。」

「あゝ……忘れてゐたが、のう娘御……そなたの兄御から、そなたへの傳言ぢやが……こゝから温泉場へゆく途上の丘に、山羊の小屋がある。あの小屋で乳を搾つてゐる若い人は、そなたの兄御ぢやの



う？」

「さうですの。」

「その兄御は、これから狐狩りに行くさうで、温泉場には下らないから、乳の配達は、そなたにやつてもらひたい、といふことぢや。」

「あらまあ、兄がそんなことを申しましたか？」

「はい。兄御はそなたを待つてゐるから、直ぐに來いといふことでした。あの山羊小屋の側を、私が通りかゝりさまにのう。この邊に足をやすめる家はあるまいか、と尋ねますと、此家を教へてくれ、妹があるから、立寄つて休むがよい。ついでに今の傳言を頼むといはれましたのぢや。」

「あゝ。さうでございましたか。」

「はい。兄御はそなたを待つてをられるから、私には構はず、行きなさるがよい。私は一服して發ちますからの。」

「はい。では、どうぞ。ごゆつくり。」

出がらしの茶を、尼僧にすゝめて、お悦は屋外へ飛出した。兄妹揃つて外出の時には、いつも家は明けツ放し、雨戸も木戸もない山小屋生活は呑氣なものだ。澤渡温泉部落へ下り途の丘の山羊小屋ま

で二丁餘。お悦は乳搾る兄を見るや、喰つてかゝつた。

「兄ちゃん！ あんたは矢つ張り狐狩りにゆくんですねツ。殺生は止めて下さい、と今朝も出がけにあれほど頼んだぢやないの。それほど反對するなら、もう一度考へ直して見よう、と、兄ちゃんは言つたぢやないか。」

「だから、俺ア、どうしようかと思つて、考へ中さ。」

「そんなら、なぜ、狐狩りにゆくから、わたしに乳を配達しろなんて、尼さんに傳言なんかしたのよ？」

「尼さんに傳言を？」

「さうよ。」

「さうよ。」

「いつだい？」

「先刻。こゝを通りかゝつた尼さんによ。」

「知らないね。」

「莊太郎は眞面目だ。」

「あんなこと言つてる！ 自分で頼んどいて、知らないつてことが、あるもんか。」



「そりやア可怪しい。」

「何が可怪しいのさ？」

「だつて尼さんなんか、一人も通りやしないぜ。おい、何かの間違ひぢやないか？」

「冗談ぢやないわ。兄ちゃんが私達の家に行つて憩め、といつたからと、さう言つて、尼さんは家で憩んでるわよ。尼さんが嘘を吐くわけはなし、兄ちゃん、どうかしてやしないかい？」

「はてな……俺ア尼さんに口を利いた覚えはないんだが……變だなア。」

兄妹は妙に眞剣な表情で、お互ひの言ふことに不信を抱くやうな、懷疑の眼で見合つてゐたが、呀と叫ぶと同時に、お悦の顔色が變つた。皿のやうに大きく見開かれた彼女の眼には、たゞならぬ驚愕と恐怖があらはれた。

「兄ちゃんツ。」

「な、なんだ？」

「あれ……あれ……あれツ。」

と、兄の胸に縫りついて、指さす彼方、山小屋の背面は、白雪をかぶつて起伏する稻包山の南尾根……馬の脊から一團の雪塊とおぼしきものが、濛々たる雪の白煙をあげながら、凄まじき勢ひで、此

方へ轉落しつゝあつたのだ！

「やあ、雪鞠だツ。」

雪鞠！ 赤黒い地肌を露出し始めた稻包山「馬の鬣」の岩石の一塊が、突風に吹飛ばされ、雪の山壁を轉落しながら、轉げる道中で、雪の包皮をつけ、刻々に肥え太つて、やつて來るのだつた。山の斜面の形状によつて、雪鞠の轉落する道は、絶えず變化したが、最後の方向は此方であるらしい。これまでも屢々あつたに違ひないが、それを途中で遮る密林があつた。密林は持主の手で、二年前に伐拂はれ、坊主頭の丘陵になつてゐる。偶然とはいひながら、何といふ意地の悪さだ！ こんな事が起らうとは、思ひもしない莊太郎兄妹は、たゞたゞ茫然たるばかりだつたが、直徑五米もありさうな戦慄すべき雪の大團塊が、行く手にあるものを壓潰しながら、丘陵を乗り越えて、轟々と驀進して來るのを見ると、莊太郎は狂氣のやうに叫び出した。

「畜生ツ。俺たちの山小屋を狙つてるぞツ。」

「あ、あ、尼さんが……尼さんが危い！」

嵐のやうにやつて來た大雪鞠は、呀といふ間に、小屋の左肩を押し倒して、摩耶の奥谷へ顛落していつた。物凄いと恐ろしいとも言ひやうのない此の刹那の光景に、莊太郎は身を震はし、お悦は顔を



掩ふた。

「悦公。俺たちは運がよかつたんだ。家にゐたら、二人とも壓潰されて、死んでるんだぞ。」

「ほんとに。さうだ！ 尼さんは何うしたらう？」

「やられたらう。さ。行つてみなくつちや。」

兄妹は山小屋に駆けつけた。無残にも壓潰されてゐるのが、物置と土間の左半分であつたのは、不幸中の幸ひだつた。二人は倒潰した柱や板壁や梁などを、取片づけるのに骨を折つたが、探し求める比丘尼さんの壓死體は、不思議なことには、何處にも見當らない。

「不思議だね。」

「私の留守に發つたんぢやないかしら？」

「はゝゝゝ。尼さんの話なんか、始めツから可怪しいと思つたが、悦公の夢だつたらう？」

「朝から夢なんか見やしないわよ。」

「ぢや、お前の留守に出發したンかな」と、さういひながら土間の片隅へ歩いていつた莊太郎。

「や、ヤツ。こりや、どうだ！ 太え狐が死んでらア！」

素麵箱の脇で死んでゐる仔狐を、腹の下に庇ふやうな恰好で、しかも仔狐の首の麻繩を、シカと咬

みくわへたまゝ、赤毛の雌狐が壓死してゐた。お悦には一目でわかつた。仔狐に乳を飲ませに来る母狐だ！ 麻の鎖を喰ひ切りにやつて来て斃れたのだ！

「可哀相な母狐は、この山小屋が、雪鞠のために壓潰されることを豫知して、仔狐を救ひ出しに来たのではないか？ 尼さんは？ あゝ！ あの尼さんは、もしやこの母狐では……お悦は慄然とした……」

……。(山中人生一挿話)



## 蝙蝠の糞

## 澤渡温泉穴小屋の洞窟

澤渡温泉部落から草津への舊道に向ひ、暮坂峠への悪路を辿つて、三岐の掛茶屋を左に折れると、難刀明神になるが、掛茶屋から真直ぐに蛇野川を渡るのである。萬葉にある古歌の有笠山直下で、澤渡川を渡り、黄いろい野苺の、枝もたわゝに生つてゐる丘陵の小徑を、半里ばかり廻々と登りつくしたところで、急峻な敷路を一氣に駆け下る。水底に白雲の動く細流の滯、炭焼竈の崩れ廢れてゐる草深い山凹を、穴小屋谷といふ。前面に聳ゆる壻山の中腹に大きな洞穴の口が見える。深草を踏み分けて、殆んど垂直な懸崖を攀ぢ登ると、三間四方もありさうな洞穴の入口に達する。その昔、高野長英が幕吏に追はれ、遁れ來つて、しばらくの間、潜伏してゐたといはれる、澤渡大洞窟がこれなんだ。黄いろい野苺の熟れ穿れる日和だつた。澤渡温泉宿丸本福田六右衛門氏の令弟と下男とに導かれて、第三紀の頁岩と凝灰岩で形造られてゐる此の洞窟に、私が入つたのは——氣の毒なことは、その秋の

霖雨に因づく山津浪のために、温泉中心部落が殆んど半滅に歸した真夜中に、私の隣室に寝てゐた福田氏令第一家は、悲惨な壓死を遂げた。その夜に限つて、隣部落に外泊した私は助かつた。部落は倒壊家屋に埋まり、夥しき死者を出したのである——私達三人は、燦然たる光蘇に縁どられてゐる洞口岩隙の淤水に、携帯の蠟燭を浸した。大型の蠟燭を半紙で幾重にも巻き、これを水にしめして火を點すれば、私にとつては始めての經驗なんだが、蠟涙の流れる世話もなく、且つ永持ちするさうだ。私達の右手には、部落の小學校で作製したといふ謄寫版刷りの、洞窟内部地圖があり、くだんの蠟燭の灯を炬火代りに、頭上に懸しながら、時には四ツん這ひに匍ふこともあり、一寸進み一寸進み、歩を刻むやうにして行けるところまで行つた。洞窟は奥まるに隨つて暗く、冷く、寒く、遂には三尺の距離を置いて膝行する人の姿も見えぬ暗黒に包まれた。洞窟の深さは、三國山脈の向ふ側にある越後の鶏の鳴聲が聞える、と昔からいはれるほどである。土地の豪傑が洞窟の終點を究めるために、單身探検を試みて、遂に再び歸つて來なかつたといふ話もある。中心部と思はれるあたりには、眞黒い池あり、小丘あり、坂あり、二階あり、小窓ありで、迷路は狭くなり廣くなり、また狭くなりして、脛を没する蝙蝠の堆糞に限なく埋まつてゐる。人間の侵入に驚いて、暗道から暗道へ飛び交ふものは、蝙蝠の群である。これから奥へは、この蝙蝠の群と闘ひ、堆糞を掘り分けなければ、一步をも進めない



地點まで詰めてから、私達は退却した。費すこと約二時。暗黒世界から明るみに出た私達は、洞口に憩ひ、リュックサツクの中の握り飯を噛りながら、閑談した。三人の前には丸本の下男によつて叩き落された一匹の蝙蝠が死んでゐる。私は言つた。

「この蝙蝠といふ奴、晝間は暗いところに隠れてゐて、夕暮から夜にかけて、姿を見せることや、生血を吸つて生きてゐることからして、何處の國でも、悪魔の表象にされてゐるやうだが、われわれ人間にとつては、頗る有益な動物だ。こいつは微菌の傳播者である蚊を捕へて食ふ。アメリカのキャンベルといふ學者の研究によると、アメリカで最も蚊の多いテキサスに棲息する蝙蝠は、たゞの一尾でもつて、毎夜約三千匹の蚊を食ふさうですよ。どうして勘定したか知らんが。」

「小さいからね。三千匹も食はなくつちや、腹のたしにはならんでせうね。」

と福田氏令弟がいつた。

「蚊が人間の生血を吸ひ、蝙蝠が蚊の生血を吸ふ。人間の仇を討つてくれるわけだな。」

と丸本の若者がいつた。

「うん。ところでその生血を吸つて生きてゐるのは、この夕暮徘徊者……蝙蝠が、特殊の消化機能を有つてゐるからで、一般の哺乳類は脾臓が小さいから、生血を消化するに適しないが、蝙蝠の脾臓は

われわれ人間の脾臓の大きさの割合からすると、およそ四百倍も大きいさうです。」

「ほう。」

「だから毎夜三千匹の蚊から吸ひ取る生血を完全に消化し、充分に栄養を攝ることが出来るといふのです。」

「なるほど。」

「さういふ特殊の消化機能のほかにも、この大きな耳が、極めて鋭敏な聴覺を司つてゐる。眼には見えなくても、その聴覺の力で、遠方を飛んでゐる微弱な蚊の翅音……つまり蚊の存在を知ることが出来るといふのです。」

「何處までも、蚊を捕つて食ふやうに出来てゐるんですね。」

「うん。それから此奴の耳の縁邊に密生してゐる毛と、口の周圍にある木の葉のやうに發達した皮膚もまた極めて敏感で、晝間、眼が見えない間は、この觸覺機關が、眼の役目を勤めるんださうだ。」

と私は言つた。その後、動物生理學に關する外國雜誌を読んで知つたんだが、蝙蝠が暗い狭い場所で、自在に敏捷に飛びまわつて、しかも障碍物に衝突しない事實は、科學上の大きな謎だつたが、アメリカのハアワード大學教授ロバート・ゴランボスト、ドナルド・クリツフインの二博士の實驗によ



れば、蝙蝠は自分自身で、高周波の音波を発生して、その音波の反響を聞くことによつて、飛びゆく前面にある障害物を、刹那々に感知しながら、警戒して避けるらしいのである。即ちこの夕暮徘徊者は、盲目ではなく、超音波による方法でもつて、盲目飛行をやるのだ。その方法が極めて敏活であるから、視覚の必要がないといふわけだ。蝙蝠が聴覚を用ひて、暗所飛行の方向を定めるといふ事實は、久しい以前から想像されてゐたことで、二人の博士は、それを證明したのである。物理學的實驗によると、一秒間五萬回の振動が最も大きい。(人間の耳は一秒二萬回以上の振動を聴くことは出来ない) 兩博士は、その天井から、幾條も針金を吊垂した實驗室で、蝙蝠を放つて實驗した。蝙蝠の耳と口を覆ふて置くと、蝙蝠は如何にも頼りなさうに、針金の間を躡めき飛んだり、壁にぶつつかつたりする。耳と口の覆ひを取り除けると、蝙蝠は完全に障害物を避けて飛ぶ。眼隠しなどは、してもしなくても、巧に飛べることがわかつたといふ。蝙蝠の自發するその超音波の聲なるものを、フィルムに記録して檢べると、その波形からいつて、恰も遠くの方で機關銃でも發射してゐるやうな音になつたさうで、廣いところでは、この夜間散歩者は、一秒間二十五回ほど聲を發し、何か障害物に近づくと、それが一秒間五十回にもぼる。もしもこの一秒間の回数がのぼらなければ、蝙蝠は針金や壁に衝突するのが、普通ださうだ。そこで人間は蝙蝠を怖がるには及ばない。彼等一族は如何なるもの

にも衝突することも望まないのだから。どんなに睡むさうに、ふらふらしながら飛んでゐる時でも、人間の頭や顔に近づけば、忽ち身を翻へして、迅速に遠ざかるからだ。

「十人が九人までは、知らないやうですが、人間にとつて蝙蝠が有益な動物であることは、生血の營養をしてくれるばかりではない。肥料を造つてくれますよ。」

と福田氏令弟が言ふ。

「あゝ。グアノだ。」

と私が言ふ。グアノは海鳥の堆糞、鳥糞石のことだから、蝙蝠グアノといはねばなるまい。

「何と言ひますか知りませんが、さつき我々を苦しめた、ぶぶぶの泥濘ですよ。あれは眞ツ暗でわからなかつたけど、蝙蝠の糞に食物の殘滓に、爛した岩屑や粘土の混合物が醱酵したもので、明るみに持出して見ると、黒褐色を呈して、ぼろ土みたいなのですよ。」

「さうだ。腐植土に酷似だ。」

「あれが窒素其他の有機物を多量に含んでゐるので、肥料としては、實に素張らしい效力を有つてゐるのですよ。」

「さういふ話ですね。」



と私は應じた。蝙蝠は冬になると、暗い洞穴の中で、體を逆さまに吊して眠る。この冬眠の間に、一米に達する厚さの糞を積み上げることがあるさうだ。これがチプロテクト、即ち蝙蝠グアノである。奥太利のシユタイエルマルヤ州ミクツニツ洞窟などには、堆糞の高さ四十尺に及ぶものがあり、その全量は、二千六百輛の鐵道貨車に積み込まれるほどださうで、國の經濟上に大きな役割を演じてゐるといふ話を、西洋の書物で讀んだことがある。この穴小屋洞窟の中の堆糞も、掘り出し掻き集めたら、随分のものらしく思はれる。

「秋田縣男鹿半島の西海岸……あすこは秋田郡南磯村字本山門前ですか、そこその北方にある戸賀村加茂……この中間の蘆の倉海岸にある蝙蝠窟は、自分も行つて見ましたが、有名ぢやないですか。あの邊では。」

「さあ。それは知らないな。」

と私は言つた。

「あの洞窟は入口から、中程までは乾燥してゐるけど、奥に入ると、こゝの穴小屋と同じやうに、岩壁から滲み出る水で濕つてゐる。蝙蝠の糞は中間部に最も多いやうに思はれました。土地の人の話によると、糞層の厚さ四、五尺もあり、總重量二萬五千貫を超えるだらうといはれた時であつたさうで

すが、最近では糞層の厚さ二尺ばかりで、總重量五千貫あるなしに減つてしまつたさうです。結構な肥料だつてんで、どしどし掘出して運び去る。それに採取人が、暗いから焚火をする。炬火をとます。蝙蝠を獲つて食つたりするので、減る一方ださうですよ。」

「ふうん。蝙蝠を食ふ者もゐるのかね？」

「さういふ話でした。」

「あはゝ。」と下男が笑つた。「蚊は人を食つて蝙蝠に食はれ、蝙蝠は蚊を食つて人に食はれるか？」

「はゝゝ。順還の形だね。」

「蝙蝠の肉は兎に角、蝙蝠の糞の中にある蚊の眼玉を食ふ者なら、この部落にゐますよ。」

と福田氏令弟が微笑する。

「蚊の目玉を？」

「えゝ。」

「へへえ！ 支那には蚊の目玉の料理があるなんて、話だけ聞いてゐるが、われわれの肉眼では見ることの出来ないほど小さい蚊の目玉を、どうして摘み取るんだらう？」

「それは目の細かい絹漉しのやうな篩にかけて、蝙蝠の糞を水洗ひにすると、糞は流失して、蚊の目



玉だけが篩ふるひの底に残留する。といふ寸法ですな。蝙蝠かろうもの腹の中で、蚊は消化せうかされるが、眼玉は糞と一緒に排泄はいせつされるといふところから、この方法でやるんださうです。私も見たわけではないから、請合うけあへませんが、糞も一緒に食べるんぢやないかと思ふんだ。油で焙いためてね。なかなか美味うまいいさうですよ。はゝゝ。」

「どうも嘘うそらしいな。蚊の目玉の料理が、支那しなにあるなんてのも、要するに話だけさ。支那には蚊、睫まつげ之蟲むしといふ言葉がある。蚊の眼瞼まぶたの睫毛まつげの間に寄生けいせいする小蟲こむしのことだが、これだつて小さい物の比喩たとへに喩へた支那流の針小文字せんせうもじだらうと思ふんです。實際じつじにさういふ微生物びせいぶつがあるかも知れないけど……蒙求もうきうの中には、窓に吊した蚤のみの畢丸せんたまの眞中を、一矢に射貫いぬいた男がゐたやうだ。蚤の畢丸せんたまを射貫いぬくためには、どんなに微小びせうな矢を必要とするか、日本人には想像さうぞうも出来ません。あはゝ。そろそろ下山げざんしようぢやありませんか。」

といひながら、蝙蝠の死骸しかいをぶらさげて、私は腰を上げたのである。これは丸本旅館まるほんりやうに歸つてから松葉燒耐せうちやうの饅まんに漬けて、紀念のために東京へ持歸つた。松葉燒耐せうちやうは丸本御自慢、起死回生の藥酒やくしゆである。蝙蝠が哺乳動物ほにゅうどうぶつ時代の初期から存在してゐるものであることを知つたのは、餘程あま経つてからだ。六千萬年前の蝙蝠の骸骨がいこつが、完全な化石くわんぜんとなつて、米國ワイオミング地方で、石油採掘者せきゆさいくつしやによつて發

見され、プリンストン大學に保存ほぞんされてゐるといふ、アメリカ雜誌あめりかざしの記事を見た。六千萬年といへば即ち哺乳類出現の初期だらう。



## 白砂川溪谷

## — 草津から花敷へ —

## 一

上越アルプスとは、誰によつてつけられた名稱であるか知らない。上州と越後の國境東端、平岳から中部の三國山を経て、西端白砂山に至る三國山脈のことである。この山脈の西端に近い上間山より北一里弱の三角點に、その水源を發し、一方に於ては、白砂山（七千尺）と八十三山……山民の説に従へば、この山頂へ登りつくには、少くとも八十三回の途中伏懸を要するので、この名があるんださうだ……それと八間山と辨天山の谷合から、落ちて来る四ツの溪流を容れ、一方に於ては、木戸山と相ノ倉岳の谷間から落ちて来る六ツの流れを併せ、恰も巨大なる蜥蜴の匍ふ形をなして、蜿蜒蛇行しつゝ、白根山麓からやつて来る長笹川と、入山の花敷温泉部落で相合して南に流れ、草津高原から斗折して来る湯川の水を取つてゐる白砂川こそは、世に知られない幽邃神祕の處女溪谷であらう。

これを探るべく、上州草津温泉を發足したのは、六月二十八日午前九時。一行は吾妻保勝會の草津温泉細野館主細野停氏、草津館主山口茂三郎氏、草津の寫眞師武藤小雨氏と私の四名である。湯もみ唄の聲に暮れた昨夜の雨空が、湯もみ唄の聲に明けて、今朝は路傍のアヤメの色も、艶に鮮かである。温泉の煙か朝霧か、淡々しく地を這ふ靜かな高原の湯の町を後にして、大澤の松林にかゝる。

こゝまで見送りに來られた細野夫人や、小さい坊ちゃんや、番頭さんに別れ、漸く老ひんとして、黄いろく沾へる蕨の葉、一二尺にも伸びてゐる柄竹に、香ばしく縁どられた雨後の山路の黒土の、冷たい濕り氣を、草鞋の底に覺えながら、行くこと七八丁で谷澤に出た。これは白根の山ふところから落ちて来る浅い溪流だが、水が美しいので、山魚が多くとれるといふ。これを涉ると、山路に少しづつ匂配がついて、谷澤原の高地を横切り、大澤川となるのである。これもやはり白根の谷間、芳ヶ平の方からやつて来る溪流で、草津郊外隨一の名瀑といひたい常布の瀧は、懸つて此の上流一里餘の斷崖にあるのだ。前日私はその近くまで登つて見たのである。偕て溪流に面して樵夫の小屋らしいのがある。

その裏手に一人の素朴な老人が、日焼けのした顔に、親しげな微笑を湛えてゐた。花敷温泉の古老、關久四郎といふ翁、私たちの白砂川行きを、前日報せてあつたので、こゝまで迎ひに來てゐる。



たことがわかつた。細野氏たちと翁とは、入魂の間らしい。老軀を引ツ提げて、はるばる出迎ひに來て貰つたのは、氣の毒だと思つたら、小雨氏の荷物まで、奪ひ取るやうに引受けて、しかも私たちよりは足達者に歩かうといふ底の元氣さだ。山の中の人は異ふなアと思つた。この樵夫小屋の背後は、大澤越えの急坂で、足の踵も没する泥濘だ。

上から下つて來る荷馬を避けては登り、避けては登り、鬱蒼たる密林の中で轉る、靜かな駒鳥の聲を聞きながら、三角點（三千九百尺）の高原に出ると、眼界は頓にひらけて、可なりの遠方まで展望が利く。前面には密林に蔽はれた白砂山塊が、乳色に薄曇つて、眩しく光る空合に連亘し、辨天山八間山、松岩山などが巨大な肩をならべ横たはつてゐる。

その目醒ましき青々しさ。後には白根の高嶺が、消え残りの雪を山巒にたゞえ、本白根の尾根に續いて、あざやかに望まれる。が、山巔だけは霧に隠れて、惜しいことは見えない。山を掠め谷を渡り來る朝の微風は、雨氣をはらんで爽々しく、見渡すかぎりの高原を埋める野生の草々は、ために露を零して靜かにそよぐ、なかに高山植物の濫採を戒める、物々しい高札が立つてゐた。

一一

野末に眞白きは山紫陽の花。可愛らしい釣鐘草や螢草が、顛へるやうに揺れてゐる。一筋の小徑はこゝで二ツに岐れる。先に立つてゐる私は、細野氏を顧みていつた。

「どつちに行きますか？」

「左の方です。さうだね。關さん。」

「さうです。」

と後で久四郎翁がいふ。

「これでは、始めての人は迷ふね。こんな分れ道には、道標を立て、置く必要がある。」

「さうだね。うん。それで思ひ出したが、この山の向ふの小倉部落で、四歳になる獵師の小俵が紛失したんだ。父親は獵に出かけ、母親は隣村の身寄が死んだんで、葬ひに行く。留守居の婆さんが見どもをあづかつて、洗濯してゐたといふが、その間に見どもはゐなくなつたです。氣がついて大騒ぎさ。部落中の若者が總出で捜しまわつたが、行衛は知れない。このうへは天狗様の占ひにでも行つて見て貰ふより、ほかに術がないといふわけ、あの遠い御所平まで出かけて行つたところが、造林小屋の方角にあたる小澤の大木の下に、見どもはゐるといふ、天狗様の御告だ。さあ判つた。早く行つて捜せで、教へられた見當を捜しまわると、なるほど、小さい下駄の齒の跡が、地べたに二ツ見つかつた。」



それだけは見つかつたが、それから先の踪跡は、さつぱり判らない。」

「ふうん。だが、いづれその邊を通つたことは確かだね。」

「さうだらう。」

「奇怪だ。四ツや五ツになる兒どもが、獨りで行ける場所ぢやないのに。」

「全くさ。みんなもさう言ふてゐる。それで今度は村の狐狸さまに伺ひを立てると、兒どもは片ツぼらの下駄の鼻緒を切つて、死んでゐるといふ御告げだ。場所は天狗さんの占ひと、寸分違はない。」

「いよいよ奇怪だな。」

「いや、もつと奇怪なことがある。天狗さんの占ひでも、確かにさういふ御告げだつたが、一體、四ツになる幼童が、どうしてあんな深い山に入つたもんか、それが解らないと、父親が狐狸さんに尋ねたところが……貉に連れ出されたんだ。貉に怨まれるやうなことをした覚えはないか?……と言はツしやる。さう言はれて見ると、大ぶん以前に、山の中で白貉を見つけたんで、鐵砲をもつて散々追ひまわした揚句、取り逃がしたことがある。有りやうの話をすると……それ、それ、それだ! その白貉は、汝に仕返しをしようと思ひ、三十五日の間、汝の兒どもを狙つてゐたんだ。氣をつけなくてはいけない。」

その白貉は汝の兒を、もう一人連れ出さなくては承知しないぞ。その上では、たとい汝の手にかゝつて殺されやうとも、いとはぬ覺悟をきめてゐる……との御宣託に、父は青くなつて歸つた。家の周圍をしらべて見ると、正しく貉の糞が、夜毎に一ツづつたれたと見えて、三十五だけところがつてゐるんだ。」

「へへえ!」

「そこで最後の搜索を試つたところが、果せるかな。造林小屋から半里ばかりの澤邊に、きちんと下駄を揃へ、打伏せになつて、兒どもは死んでゐた。死體を見つけたのが、一昨日でさ。」

この話を聞いた翌日の澤渡温泉で、私は東京の新聞の上州版に、大澤溪谷に於ける獵師の兒の溺死體發見云々といふ、十行たらずの記事を見つけた。白貉に連れ出されたとは、むろん書いてなかつた。氣の毒な死に方をしたものだ、と私たちは言つた。何と山の中の出来事らしい話ではないか?

### 三

この挿話のうちに私たちは、淡紅褐色の甘草……百合の一族らしい……群落と、彼方此方に山干瓢を散らしてゐる青い濕潤な窪地から、笠を伏せたやうな斜面の多い丘陵を通つて、「藥罐落し」の上



に出た。眼下にひろがる潤葉樹くわつえうじゆの深林を隔て、相對する三角點(四千三百尺)の山の中腹から、麓へ一塊かたまりの部落がのぞまれる。私たちは此處で休憩きゆうけいして、深林の中へ坂路を下つた。

昔は此處から藥罐やくかんを落とすと、何處までも轉がり落ちるので、この名があるんださうだが、今は切開きりひらかれて、匂配におひが緩慢かんまんになつてゐる。路傍には魚釣笠うおづかや蕨わらびが密生し、崖からは山清水やましづみづが湧き溢れてゐる。降り切つて四丁ほど左折するところに、尻焼しりやきと稱する温泉が谷間にあつて、この久四郎翁の經營けいぎにかゝるといふ。

そちらへは行かず、右へ曲り、濫峙らんたふげの方から流れて来る長笹川に、高く架け渡された釣橋つりばしをわたり斷崖だんがいを碎き崩した石ころ坂を下ると、鬱翁うつげうたる山を脊の花敷温泉、家數僅かに四、五戸の小部落だ。

この邊一帶を入山いりやまといふらしい。部落の中央に久四郎翁の家……關晴館くわんせいくわんといふ二階建の廣々とした旅舎がある。部落は左方の獨立標高三千四百尺の山と、京塚部落を中間に置いて、三角點三千六百尺の山と、背後の三角點四千尺の山に圍繞かほらされてをり、左方から来る長笹川との合流點がふりうてんにあるのだ。

この二ツの溪流は、校舎の前の廣い磯いその間を通つて、向ふ側の巒壁らんぺきの下で落合ひ、京塚きやうづかの方へ南下してゐる。關晴館くわんせいくわんの二階座敷は、これらの眺望てうぼうを求めにいゝ。こゝに脊せの荷をおろし、シャツと禪ぜんのまゝ、私たちは温泉場へ向ひ、先程の釣橋を渡り、草叢くさむらの小徑こみちを下つて對岸に出た。長笹ながささの溪流けいりうに

臨むといふよりも、この清流せいりうとすれすれの橋の袂たもとの岩石を、折疊せつたつみ造つたやうな天然の浴槽よくそうが二つある。神々かみかみしくも淨らかな湯の泉は、あるかなきかの仄ぼろかな匂におひを薫じ、絲遊かみゆのそれよりも幽かな湯氣ゆきをあけて、こゝに満ち溢れてゐるのだ。水晶すいしやうのやうに琅々ろうろう澄澈ちやうせつした湯の底を覗くと、砂鐵さてつではないかと思はれる暗灰色あんくわいしよくの、重々しい砂粒さつぶが一面に沈澱ちんぜんし、岩床の割れ目から、ぶくり、ぶくりと圓まるい小さい氣泡きぱうが浮き上る。湯が噴ふいてゐるのだ。恐らく昔は、これもなかつたに違ひない粗造りあらつくの小屋が、板葺屋根いたづきやねに石のおもしろを列べ戴いたいて、雨や雪を防ぐために、浴槽よくそうを圍かこんでゐるけれども、人間の臭におひや人間の垢あかには、全く縁えんの遠い感じのする、飾かざり氣のない、裸はだかのままの、原始的げんじつてきな温泉として、私は興味きゆうみ深く感じた。

たまたま病を療やひに来る此の近在の農夫樵夫なむきざうふや、彼等が妻女の肌をこそ知れ、都會とくわいの人の姿は知るまい。夜はこれに提灯ちやうてんをつけて入るらしい。小屋の前で裸はだかになつて入り込む。胸から足の爪先つまさきまで、青白く透き通つて見える。外を覗けば釣橋つりばしの下、相迫る翠巒すいれんの裾すそを洗ひゆく白波。極樂ごくらくだ。

「白砂山しろすなの陽に花敷あり、泉は甘くして土黒く、草木叢茂して民鮮たみあし。居は幽ゆなり勢は阻さなり。隠者いんじやの盤旋ばんせんする處。清流に濯あつて自ら深くし、山に採る美、茹くふべく、水に釣る鮮あし、食すべし。起臥きふに時になく、唯安んずるに適す……なんて文句もんくは、ちと古風かな？ 兎うに角、奥上州おくじやうしゆの山は、それほど高



くはないが、深いですなあ。麓から山頂まで、眞ツ黒く生ひ茂つてゐるから登りにくい。ところでその山に採る美を、蕨、薇とすれば、水に釣る鮮は山魚でせうな。一昨日、上信國境鳥居峠を越えて、吾妻入りをしてから、大ぶん彼方此方で、山魚を食べて來ましたが、山の味といふか、美味いですなあ。と私がいつた。

## 四

温泉に暖つて出る。宿舎に引揚げる途中で、細野氏たちは營林署の役人を訪れる。私と久四郎翁は宿庭をぬけて、白砂川の開運橋に向つた。架木も欄干も、ぐらぐらに弛み、壊れ朽ちた長橋だ。私は白砂川の溪谷を、蝟蛇の形になぞらへたが、この橋上から眺める溪谷は、その蝟蛇の肩口の断面だ。岩を越え石を跳ねて逆巻きくぐる碧流を挟み、垂直の巖屏風をなして向合ふ蒼黒い岸壁の、その多面的、寄木細工的な形貌の幽雅さよ。この邊では、まだ驚くべき高さをこそ有つてはゐないが、嘗て斧鉞の響を聞かないといふ兩岸の原始林は、層雲のやうに繁り、濃緑の翼翅をひろげて、澗潭の上に垂れ掩ふてゐる。ために曇り日の微光は、悉く遮られて冥く、翳々たる上流の谷の奥深きは、こゝから眺めただけでも、想像され得るやうだ。

これが比較的村里に近ければ、夙に然るべき名稱をもつけられてゐるだらうに、溪谷の背景となつてゐる、頭の尖つた山の名が、木川付山といふだけで、この潭の名はないらしい。私は尋ねた。

「奥に入ると、谷はもつと深くなるんですね。」

「とても、こんなものぢやありません。」

「あの岸壁を傳ひながら、巖に噛りついて溯るわけにはいきませんか？」

「駄目ですね。たゞあの兩側の山の、流れに面してゐる深林の中へ、攀ちて、上から下を覗くよりほかに、法はないやうです。それも大變な藝當で、時間を食ふ冒険でさ。」

「さうして見ると、上流の景色は、こゝから和光原をのぼり、大原高地を通つて、溪谷の横ツ腹を突切りながら、眺めることになりませんか。スルスの岩洞へは、一日行程ではゆけませんな。私たちの豫定では、あれから相ノ倉の方へ出て、四萬方面へ抜けることになつてゐるんです。もつとも、さう行けるか、どうかを、細野さんたちは、營林署の役人に訊き合せていつてるが。」

こんな話をしながら、私たちは宿へ引返した。日本酒の空罎に、蝮、縞蛇などを、うようよ詰込んで、ぶらさげた爺さんが、赤い山葵の花で明るい戸口に立つて、部落の子供達と頻りに喋つてゐる。

「これはみんなお爺さんが捕つたのかい？」



「さうだ。この谷の奥で捕つたんだ。」

「たくさんあるんだね?」

「あるとも。」

「何處へ持つて行くのかい?」

「草津だ。草津に持つていつて賣るんだ。この蝮なんぞ、五十錢から一圓五十錢にならア。東京あたりに持出しやア、その二倍三倍の値になるんだがねと。」

と蠶を叩いて笑ふ爺さんの嘸聲を後に、二階へ上る。寫真器を擔いで、礮を迂路ついでゐた小雨氏も、撮影監督役の山口氏も、夙に歸つてゐた。細野氏がやつて来る。

「一昨日來の雨で、谷川の増水甚だしく、徒渉不可能ださうです。溪谷の横斷地點が、既に水深首迄といふ。水勢激しくして近づくべからずつてさ。」

「それは困つたな。」

「いけませんか?」

私は念を押した。

「えゝ。どうもね。時季が悪いからねえ。仕方ありませんから、いづれ再舉を期することゝして、

豫定のコースを変更し、これから暮坂峠を突破し、澤渡温泉に出ることにしちや、どうでせう? そ

れから先の段取は、そこで決めるとして。」

「それもよからう。」

「さうしよう。」

と山口氏が賛成する。折角こゝまで來ながら、溪谷の奥ノ院を探らずに終ふのは、残念の極みだが減水を待つてもゐられず、澤渡ゆきと決定するほかに、妙案はなかつた。花敷名物といふ生蕎麥のパン(グル、焼)と、酒、ビールが運び出され、營林署入山官舎……むつにお粗末な官舎……から、年若い役人小夏氏が挨拶に來られた。かくて一時間の後、私たち四人は、久四郎翁の先導で、こゝを出發し、開運橋を渡つたのであるが、「日も暮坂」のといふ暮坂の嶮路で、豪雨に遭ひ、濃霧に襲はれ、泥まぶれの惨な歩行を、深い森林の中に、続けねばならなかつたのは辛かつた。



## 山の獵奇

## 一

A氏は語る。

「此席に集まつてをられる三人の登山道樂家諸君は、これまでに随分方々の山や谷を歩かれたんだから、いろ／＼變つた見聞エキズベリメントの持合せも豊富にあるだらう。なかには身の毛も逆立つほど慄然とした経験又少くはあるまいが、いや、實際、思ひ出すと今でも肌寒く覺ゆるやうな経験が僕にもある……」

初夏の一人旅。上州川中温泉から草津へ山越をした時なんだ。世に暮坂の嶮といふ、あいつ、東から登るのは樂ぢやないね。あのひどい急坂を何うやら突破して一里半の山路を、見寄の部落へ迷ひ下り、須田溪谷を横斷して眞つ黒い瀾葉樹の原始林を遮二無二くぐり抜け、辛とこのことで三角點（三百尺）の地點に辿りついたのは、白砂山塊に夕日が落ちかけてゐる時刻。地圖を頼りに不案内の山を彷徨さまよふて來たものだから、存外の時間を喰つたんだね。こんなところで暗くなつては往生だと思つて

焦り出したのは、いつもの傳だが、地圖を見ると、こゝから大澤川といふ溪流を直指して下れば、溪畔に家數五、六軒の品木部落があるの、いざとなれば其處で宿の無心をしやう、といふわけだ。下手に慌てることもないと思ひながら、一息入れて此の見當と思ふ方角の密林や草深い荒地を踏み分けて歩き出した。

漸くにして四邊は夕闇に包まれ來り、足元は次第に覺束なくなる。僕は疲れてゐる足を引摺つて急がねばならなかつたが、七百米も下るまでに出會ふ筈である小徑などは、いつの間に踏切つたものか。跼よろめき出たところが何處かといふと、部落よりズツと東に寄つた湯川らしい谷川の鬱蒼たる岸なんだ。そこから部落へ向ふには踏跡もない峽澗だから、密林中の藪を潜るより法がない。そんな藝當の出來る時刻なら思ひ切つて演るだがね。弱つちまつた。迫り來る夜の糟氣を肌身に痺と感しながら、無人の境を涼々と落行く谷川の流に臨んで、さて何うしたらよからうと思案しあんにくれる。心細いかぎりだつたが、忽ち此の二つの眼玉は思ひもよらぬものに出會つて、驚きの餘りに丸くなつた。いや全く吃驚くじしたよ。

十二、三間上流の薄闇に、黄色い灯の圓暈がチラツと現れたかと思ふと岸壁の茂みを縫ふて流れに下つてゆくではないか！ 何だらう？ 諸君。この溪流には山魚がゐるんださうだ。そんなら樵夫か



炭焼が夜釣に來たんぢやないかと思ふだらう？ 僕もさう思つた。然し山魚の夜釣なんて聞いたことがないやね。ぢや何だらう？ とまた暫く考へたが判らない。けだし人間には違ひない。さう思ふと別に怖がることはあるまい。僕は岸壁を匍ひ下り奔流に拉はれないやうに磧つたひに、灯の方へ近づいて行つた。灯は提灯サ。樹の枝に懸けてあり、傍らの渚は岩石で壘圍んだやうな窪溜となつて、微かな湯氣を吐いてゐた。温泉が湧いてゐるらしい。そんなことは珍しくないけれども、その温泉を浴びに來たんだね。胸まで浸りながら凝乎と蹲んでゐる者がある。

諸君。想像がつかますか？ それが二十四五歳の女であらうとは！ あへて顫ひつきたいほどの美人でこそないが、凄いほど垢ぬけのした肌が……深山淡雪草……水花とでも言ひたい感じた。婀娜女。こんな山ふところに住み佗ぶる代物とは品が違ふんだからね。現實世界のことゝは思はれぬ神祕奇怪の感に打たれて、僕は岩蔭に身を寄せ息を呑み、たゞ暫くは驚異の眼を睜るばかりだつたが、それまでは、横顔しか見えなかつた彼女がふつと此方に向く途端……おやツ……口から飛び出さうとする聲に蓋をした僕だ。

## 一一

A氏は語り續ける。

「僕はこの女を知つてゐるぞ！ いや。何處かで見たおぼえのある顔だぞ！……とさう思つて記憶を呼び起すと、漸くのことどわかつた。それは二年前、山で負傷して歸京つた僕が、しばらく入院してゐた或大きな病院の看護婦なんだ。詳しくいふと僕の病室の隣室に中耳炎で寝てゐた患者の付添ひ看護婦……同僚三十人ばかりのうちで一番の美人……ピカ一だつたが、僕に付添つてゐた看護婦とは仲よしだつたんで、僕の病室に始終遊びに來たもんだ。

交際つて見ると、なかなか剛巧で親切で優しい氣質の女さ。これだけの容色を持つてゐる此の種の職業婦人には珍しいと思つたほどで、帽子を脱り白衣をぬげば、何家かの若夫人としか見えぬ氣品があつた。名前は確に芳子とかいつたが、中耳炎氏のお氣に召すこと夥しく……誰でもちよつと惚て見なくなる女ではあつたがね……氏の惚方に至つては頗る大眞面目だつた。聞くところによると氏は下町屈指の時計店の主人で、そのころ五歳になる女の兒を置いて妻君に死なれたのださうだ。

その女の兒が時々父親の見舞ひにやつて來ると、芳子の君が商賣氣をはなれて可愛がる。兒どもの方でも母親のやうに馴づいて離れなんだから、折角のこと奥さんになつて貰へば兒どもだつて喜ぶだらうと、惚た勢ひ考へたね、女の方だつてさうサ、そんなに年齢も違はない堅氣の金持……下町の時



計店といふからには相當の財産がなくては叶ふまい……その奥さんに選ばれるなんて、看護婦としちや破格の出世だらうから、兒どもの面倒を見てくれないかといふやうな相談をうけて、嬉しく思はぬわけがあらうか？ 二つ返事で承諾したに違ひない。時計店の大將が退院すると間もなく彼女は白衣白帽を脱ぎ棄て、時計店の後妻になりますべく迎へられて行つた……といふ目出度い話。……それは僕の退院後、彼女の親友であつた僕の付添看護婦と、省線電車の中で偶然出會つて聞いたのだが、それつきり芳子君に會ふ機會もなければ、彼女の噂も聞かず、思ひ出すこともなく過ぎて今日に至つたわけサ。

その芳子なんだよ。僕を距る十歩。提灯の光に照らされてゐる肌眞白き女といふのが、何とその時計店の夫人ではないか！ 僕は自分の眼を疑はずにゐられないほど不思議な氣持がした。然し考へて見ると可怪しい。何が何う間違つたつて、東京下町の時計屋の夫人、うら若い身そらで、人も住まぬ暗い深山の谷川の温泉に、たつた一人、おぢ氣もなく浸つてゐるなんて……大膽不敵な……いや途方もなく氣違ひじみた不可解なことがあるだらうか？ 人違ひぢやないかしら？ 他人の空似といふこともある。人違ひだらう？ それにしても酷く似てゐるなア。瓜二つだと僕は思ひ惑ひながら、瞳凝らして岩蔭から窺つてゐると、女は聽て岩間の温泉から這ひ上り、美しく色づいた肉づき豊かな己の體

に、しばし悠々と見惚れる風情だつたが、拭きもあへず、岩角に打懸たる着物を引かけ腰帯をしめる、提灯を手に岩壁を登る……何處へ行くんだらう？……僕は引付けられる心地で忍びやかに踪を跟けたのだ。

半丁ばかりを藪、甘草、山紫陽花の密叢に埋まりゆくと樾の深林に入る、その傍に蕙がけの小屋があらうとは知らなかつたので、一寸意外だつた。女はそこに入つたから、怖々近寄つて板戸の隙間から中を覗くと、天井から吊るされた石油ランプの眞下、汚い夜具の上に巨軀を据ゑてゐる一人の老爺がだ、鼻も口も爛れ腐つた怕しい顔に眼をむいて此方を睨んでゐるぢやないか！（お父様、何を見てゐるんです？）と女が言つた。（屋の中を覗いてゐる奴、打殺してやる、芳子！ 山刀を出してくれツ）……僕は何處を何う逃げたか全く夢中だつた。やつぱり芳子だつたんだよ、レブラの父親にこつそり會ひに来てゐたんだ。亭主には勿論祕密だらう、人の素性は判らぬもんだが、この女の父親がレブラとは！



「B君。白根葵の花がよほど御意にかなつたと見えるね。お安くないことがあつたらう？ は、僕も一つ負けずにエロ・グロ入りの馬鹿噺をやらう……。白根葵ぢやないが萬座から白根山に登つたついでに思ひ立つたんだ。草津峠に下つて上信國境を赤石山（六九百尺）から尾根續きの三角點（七千尺）に向ひ更に尾根づたひで岩菅山（七千八百尺）に達しやうといふのが一日の歩程さ。こんなコースはありやしないやね。登りは少いけども針葉樹の森林帯で全く道がないのだから應へた。山頂を究めたのは午後四時頃だつたよ。この山は近頃大ぶん宣傳されて人氣を呼びつゝあるんだが季節が少し早いためか一人の登山者にも出會はず、石室の御厄介になつた翌る日が霧。霧の中を發咄温泉に向つて下るつもりで歩いてゐたところが、方角を失して登山道へは出ず、雜魚川溪谷の水源と思はれる密林の、影暗く鬼氣のこもつて頗る厭な深澤へ迷ひ込んぢやつたんさ。失策つたなアと思ひながら、地圖を廣げて見ると、いゝ鹽梅に澤の對岸から發咄へ通ずる小徑がある。で、その見當へ搔分け押切つて行くと、サルオガセの黒髪ふりかぶつた水楢の喬木鬱鬱たる蔭。紅いニワトコの花で彩られてゐる澤縁に、柚夫の棲み家らしい怪げな小屋一軒見つかつた。草葎々の板葺屋根は剥ぎめくれ軒廂は腐れ傾き、狐のお札など貼りつけた戸口には古い馬の草鞋が吊るしてあらうといふ頹朽ぶりだ。荒れ放題に荒れてはゐるが、どうやら煙臭いのは廢屋ぢやないんだナと思ひながら、道を尋ねに行

くと、骨の挫折れた破れ障子が立切られ奥は暗い。何となく忌はしい豫感を抱いて戸口から覗いたんだが、あゝ、何といふ慘鼻なものを見たらう！ 青白い毒茸のポツ／＼生えてゐる濕っぽい土間の彼方に一塊、此方に一塊、生々しい血痕に染み汚れた布……引ツ裂かれた緋の浴衣と女の腰帶とが……血腥い臭ひを漂はしてゐるではないか！ 傍らに引つくり反つてゐる藁草履も血だらけなんだ。上り口の柱にも古障子の棧にも大きな手の痕が赤くべつとりついてゐる。

今し方。この小屋の中で、どんなに戦慄すべき犯罪が行はれたかといふことは一目で判つた。途端古障子の破れ目から、年の頃は四十七八、残忍そのものゝやうな男の鬚の伸びた眞青な顔が、ぬつとあらはれて、凄い眼玉が此方に向けてギョロツと光つた……ああ實際このときほど身に迫る危険を頭の天邊から足の爪先まで感じたことはないね……腰をぬかささんばかりの恐怖に襲はれて、いや、逃げたの逃げないのと、二三丁は無我夢中だつたが、辛とのこと小徑へ出たので、後から追ツ駈て來やしないかと思ひながら振り返り振り返り、足を早めて到頭發咄へ着いたときはホツとしたよ。

諸君も御承知だらう。此處は岩菅山登山口五千三百尺の山中に温泉が湧いてゐるけれども人臭に遠い小部落。こゝから地獄谷を経て遊へ入る段取なんだ。

そこへ太かい風呂式包を背負ふた頑丈な婆さんが、鈴の音も牙え牙えしい櫓馬に乗つて、地獄谷の



方から登つて来た。馬の轡を取つてゐる馬士といふのが、色こそ黒いけれども、眼のパツチリとして口元に愛嬌のある無邪氣さうな……山奥には餘り見あたらぬ濫皮のむけた十八九歳の娘なんだ……瀧縞の絆纏に紺の股引。素足に草鞋ばき。菅笠といふ装束。婆さんは馬から下ると尻を捲つて、僕が逃げて来た小徑……あの恐ろしい殺人小屋のある方角へ足達者に登つて行くぢやないか！ あの小屋の他にも家があるのかしら？ と僕は思つた。」

## 四

C氏は語り續ける。

「さう思ひながら、馬から下りた婆さんの後姿を不安の眼で見送つてゐると、件の娘……女馬士が空馬を曳いて僕のそばにやつて来た。濫温泉の方へ行くんだつたら、返り馬で安くして置くから乗つてくれないかと言ふのさ。馬なんぞに乗る氣はなかつたが、僕の他に客はないから、僕が乗らなければ空馬を曳いて歸ると言ふのだ。一筋の山道を空馬の尻について歩くほどなら乗つてやれと思つて乗つた。」

(あの婆さんが登つて行つた方角に人の住家があるんだらうか？)

(はあ。小屋が二三軒あります。)

と女馬士は答へた。婆さん。よもや彼の小屋へ行きはすまいと思つたね。

女馬士は年齢が若いせいかわ無口なのか……それとも岩菅山から本道を下つて来たんだと思つてゐるのか……僕に向つて何處から来たかとも言はない。僕も口を利かないんだ。血まみれの裂布。草履。柱。破れ障子。眞青な怪漢の顔……小屋の惨状が眼先にチラついて……殺した男、殺された女は何者だらう？ 何が故の兇行か？……僕の頭はそれに對する空想で一ぱいになり、異様な昂奮に胸は妖しく顫へてゐたんだからね。地獄谷を過ぎ濫の温泉部落へ着く時分に辛と口をひらいたやうな次第……この部落に飲食店はないかと訊いたんだ。朝から物を喰はずにゐるんで腹は北山。信州中野でといふ考へだつたが、まだ可なりの道程だし、するとこの女馬士の伯母がこの部落で旅人宿をやつてゐる、汚くてもよければ御案内しますと言ふから、そこへ乗着けて見ると、藁葺屋根に花菖蒲が咲き列んで角行燈が軒に掛り、小廣い家ではあるが、襖も疊も焦茶いろ。柱などは黒光りに光つてをり、呑氣なことには誰もゐないんだ。女馬士が捜しに行つて、角力取みたいな格服のニコ／＼した中婆さんを見つけて来る始末。こんな家ではと思つたが、ともかくも酒を命ずると、女馬士の言ひ草が變つてゐる。

(旦那さん。お酒飲むんですかね？)



(うん)

(お酌させて下さらねえか?)

(君が?)

(え)

と笑顔で頷くのサ。女馬士のお酌は奮つてる。思ひのほか捌けた娘だ。気が利いてゐると思つて快諾の意を表すると、彼女は馬をつないで來ますと言ひながら、いそいそとして裏手へ廻つて行く。僕は爐邊へ上り込んだ。有合せの落の煮しめ、コゴメの胡麻よこしを肴に下味地酒を舐めてゐると、十分ばかり経つてから女馬士は家の奥から出て來たね。

見ると紅い長襦袢の上に田舎柄ではあるが銘仙の袴。派手なメリンスの帯をしめて、而も薄化粧をさへ施してゐるぢやないか。女馬士とは思はれぬ艶な姿。驚いたよ。

(大層な早變りだね)

(ほ、ほ。これは此家の従妹の着物です)

と言ひながら僕の側に侍つて爛徳利を取り上げた。その手首に三日月形の大きな古疵があるのは草刈り鎌か何かで切つたんだらう。愈々驚いた。お酌のしかたが素人でないんだ。

(馴れたもんだねえ)

(は、は。旦那さん。この娘は中野町の藝者ですよ。榮家の音丸といひますだよ)

と伯母さんが笑ふと音丸嬢も笑ふ。さてこそは進んで酒の相手を志願したんだね。意外。(道理で何處やら垢抜けがしてゐると思つたが、馬なんか曳いてるんだものまさか藝者とは!)

(いえ。旦那さん。山登りのお客様に頼まれりや馬も曳くし荷物も舁ぎますだよ。強力だから。今日は中野の産婆様乗せて發咄まで行きました。あの奥に此の娘の親の家があるですよ。獵師でな。お母がお産しさうだから産婆様つれて來てくれと言ふ使者だけんど自動車出ねもんだから……)と  
いふので、ハツと思つた。

そのお産の家といふのは戸口に馬の草鞋を吊るした是々の小屋ではないかと訊いた。

(さうだよ。旦那さんそれで此の娘は今夜家に泊りますよ。お前様も一緒に何うだね?)

と來たね。人殺しと思つたのはお産だつたのサ。それも判明したが、藝妓の馬士が着物を着替た理由も判つたよ。は、は、は。



D氏は語る。

「は、は、は。僕のもナンセンスに終る話だが……夏だつた。S君と二人。清水峠（五千尺足らず）をこえて越後清水村へ出るつもりで上州側の白樺小屋跡まで舊道を登つたが、いやはや恐ろしい廢道……熊笹と莽草に吞まれつちまつて、迎も日のあるうちに清水部落へ着けさうもないから、登川源流の畔に幕營の仕度をしてゐると、これも僕等と同じ考へで登つて來たらしい越後の毒消賣り……二十五六歳を頭に色の黒い菅笠の娘が二人……へとへとに疲れた姿さ。よほど參つてゐるんだ。

極りの悪いのも遠慮も山の中で斯うなると問題ぢやないね。蓆を被つて寝るから三つの頭だけ天幕の内へ入れさせてくれといふ相談だが、頭だけでは困るだらう？ 厄介だが仕方がない。女三人を真中に僕等は兩端に外向いて、窮屈を忍びながら寝ることにしたが、さて夜半にふと眼を覺ますと僕に脊なかを向けて寝てゐた圓顔の娘が僕の肩に手をかけて靜かに揺ぶりながら

（もし旦那さん）

と囁くやうな聲。

（何だい？）

（起きてくだつせえ）

僕はムツクリ起き上つた。見ると他の二女も、いつ起きたのか、角燈のもとに縮こまり、怯え切つた顔つきでブルブルふるへてんのサ。

（何うしたんだ？）

（これ見さつせえ）

と指さゝれて氣がついた……深夜の山氣沈々として重く冷たく澱み、風のかの字もないのに、天井から吊るされてゐる三角燈が、右に左にブラリブラリと揺れてゐるんだ。

（オラは眠ることが出來ねえだで、ずつと眼あいて、これを見てゐたら獨りで動き出したよ。それから是もだよ）

と言はれて見ると、なるほど、揺れてゐるのは三角燈ばかりではない。天幕全體が震幅の大きい緩慢な地震にでも揺ぶられてゐるやうにフラリ、フラリと揺れてゐるぢやないか！ ハテナ？ さう思ふと急に恐ろしくなつて來たので、向ふの隅つこに寝てゐるS君を、そつと揺り起して此ことを告げる、と、S君は寢不足の眼をすゑて揺れる天幕を見つめてゐたが、さすがの豪傑も顔色を變へてしまつた。

女たちはもう齒の根も合はぬ有様で、鞆と抱合つたまゝ寤みあがつてゐるんだ。やがて斯ういつた



のはS君。

(天幕の眞上に何だか墮つてゐるやうだぜ)

(オラもそんな気がするだよ)

(さう言へばそんな氣配があるね)

と僕も言つた……いはゆる魑魅魍魎と稱して山奥に入ると、怪獸の形をした山靈が、折々人間を感害するとか言ひつたへられてゐる……深い山へは屢々入る僕なんだが、その怪獸には一度も出遭つたことがないし、そんな怪物の出る時代でもあるまい。

(何だらう?)

(何でも構はん。こんなときに怯えちや、却つてよくない。相手が何であらうと、怖がる風を見せちや、つけ込まれるから、一番勇を鼓して此方の威勢を示さなくつちや駄目だよ)

(何うするんだい?)

(脅かすんだ……一、二、三の合圖で鯨波をあげる)

(大丈夫かい?)

(ビクビクするなよ)

と言ひながらS君は顛へてゐる女たちに向つて

(君たちもオレの言ふ通りにするんだよ。何でもいゝから力一ばい怒鳴るだ。いゝかい?)

彼女たちは迎も不安さうに頷いた。S君はリュックサツクの上に見して置いた懐中電燈を引摺みさま、指揮棒代りに……一、二、三……わあッ……天幕の眞向をむいて腹の底から絞り上げた五人の……恐怖に打克たうとする悲鳴と咆吼とが、深山の寂寞を破つて爆發した瞬間。幕上の怪物。餘程おどろいたらしい。ドサツと地面に飛び下る音がした。同時にS君は懐中電燈をひらめかして幕外へ躍り出た。

(やあッ。猿だッ。猿だッ。畜生。逃げて行きやがる!)

はゝゝゝ。猿だつたんだ。」



## 三原の花

## 一

馬士の追分浅間は焼けて

暮れる白根の峯の雪

荷馬の口を取つてゐるのは、束ね髪に手拭の頬かむり、緋の筒袖に山袴をはいた。十八歳の女馬士お花だ。硫黄山の硫黄採掘場で働いてゐる頃は、降る雪のかなたに浅間の噴煙も見えたが、硫黄俵を馬に積んで、山を下りかけると間もなく、後から唸りをあげる白根風。物凄く吹雪と戦ひながら、颯々吼え狂ふ落葉松、白樺の林道を一里ほど下れば、草津街道は石津平。往來途絶えた道端の、雪に塗れて打伏すやうに蹲る。足袋はだしの男の姿に、お花は驚いて駆けよつた。

「もし。あなた。どうなすつたんです？」

「が、崖から落ちて足を挫きました。草津から此處まで、痛いのを我慢してきましたが、もう一步も

あるけないんです。」

「まあ、それはお困りでせうね。何處へ行きなされるんですか？」

「足利へ参るんです。」

「足利へツ？ 大變ですね。お天気さへよければ、この邊の宿場には、馬も駕籠もありますけど、この黄昏の風雪では、逆も出ますまい……あの……私の家は此處から一里半ほど下の三原宿ですが、この馬に乗せて上げますから、私の家まで行つて、吹雪の止むのをお待ちになつては何うです？ 歩けないといつて、こんな處に居坐つてたら、凍えますよ。」

「はい。御親切有難うございます。」

「ねえ。さうなさいましょ。」

と男の顔を覗くやうに見た、かと思ふと、お花の眼は丸くなった。

「あらッ。あなたは機庄さんのお店の方ではございませんか？」

「えッ。」

男も驚きの體だ。

「あの……久次郎さんと仰有るんぢやございませんか？」



「そ、さうです！」

「やつぱり、さうでしたか。わたくし宮崎熊次郎の娘でございます。」

「宮崎……と仰有ると？」

「三原の熊次郎です。」

「あゝッ。三原の親分？」

「ほゝゝ。こんな風姿をしますんで、お見それなすつたでせう。宮崎の花でございます。」

「こりや意外！」

ドス蹴く踵れ上つてゐる露な膝を立て、男は驚喜の眼を見張りながら、お花の顔を仰ぎ見た。

「なるほど、お花さんだ。いや奇妙な處で出會ひましたなア。」

馬首に吊された蛇の目の銅鈴が、雪を捲いて來る烈風に、鏗鏘鳴り響く。

## 一一

浅間の北麓、吾妻川の絶壁に臨む宿場が、杵掛からと上田からの山道が出會ふ三原だ。以前は相當に光つた構へだが、今は朽倒れんばかりの表口の油障子に『豆腐』とある二階家。薄汚い奥部屋に寢

てゐるのは病の母親お常。行燈の蔭に坐つてゐるのは娘お花だ。

「久次郎様は寢ましたか？」

「あゝ。疲れてゐなると見えて、もう躰だよ。足が痛んで眠れるかしらと思つたが。」

「さうかい。一體。どうして崖からなぞ落ちたんだらう？」

「それがサ。面目ない次第だと仰有るんだよ。機庄の旦那の命令で、草津へ呉服物の賣掛代金を取立に行きなすつたんださうだ。草津は始めて踏む土地だが、桐島屋に泊れといふことだつたから、桐島屋に泊つたが、思ふやうに金が集らないんで、見切をつけて足利へ歸らうと思つてゐると、お湯の中で馴染になつお客……そいつが曲者サ……その客に誘はれて、離座敷の旦那博奕に手を出した揚句、懐中の四十七八圓、そっくり取られてしまつてから、氣がつくとイカサマ賽を使つてゐたといふんだよ。」

「ふうむ。お店者と見て舐めたんだね。」

「さうサ。だから久次郎さんが口惜し紛れに、盆の上の金を搔拉つて逃げようとする、横から突倒されたんで、やり損なつたんだ。この野郎ッ。賭場荒した。打殺しちまへてんで、貸元の乾兒が總立になつたから、いきなり障子を蹴倒して中庭へ飛び出すと、鏡のやうな氷で、足が滑つて崖になつて



ゐる石垣の上から裏道へ落ちた……野郎待てッ……といふ聲が聞えた。捕まつては大變だと思つて、温泉場を出外れるまで、無我無中で走つたんだ。たうとう歩けなくなつて、石津平の雪の中にへたばつてゐる處へ、私を通りかゝつたのサ。さういふ譯だから、天罰と思つて足の痛みは我慢するけど、自分のやうな奉公人の分際では、失した金の工面もつかず、何といつて主人に申譯をしたものか、思案にくれてゐると、さう言ひなさるんだよ。」

「ふうむ。飛んだことをしたもんだね。そら心配だらう。こんな時にでもお助け申さなくちや、あの方へ御恩を返す日はないんだが、ねえ、お花。以前とは違つて今の私達には一兩の金も出来やしない。」

「口惜しいねえ。」

母娘は嘆息を吐くばかりだつた。數年前のことだが、鬼金貨といはれる足利の鍵屋萬衛門の家に、五人の覆面強盗が押入つて、一萬に近い金を強奪した事件がある。前橋榎町の白金屋文七は關東一の大貨元だつたが、警察當局の壓迫に堪へなくなつて一家離散した。豪奢な生活から身の置場もないやうな窮地に追詰められた文七は、遂に渡世人の足を洗つて、白浪稼業に轉向した。鍵屋を襲うたのが強盗の店開きだつた。文七の家に草鞋をぬいでゐた博突打の宮崎熊次郎は、強盗仲間引摺り込まれて、警官と亂闘し、鍵屋の扉を乗越えて、隣家の機庄へ逃込んだ。その納屋に潜伏してゐる彼を

見つけたのが店員の久次郎である。熊次郎は手を合せて久次郎を拜んだ。鍵屋の強慾非道を知つてゐる久次郎は、懷中に飛込んだこの窮鳥を助けてやつた。これを恩に着てゐるので、熊次郎はその後足利へ出向く度に、久次郎へ禮を盡すことを怠らぬ。お花も父親に連れられて、二三度は會つてゐるのだが、熊次郎が賭博で二度も入獄したので、自然疎遠になつてしまつたのだ。その恩人の急場を救ふことが出来ずに、義理を缺くのが、お花母子には辛かつた。

「イカサマ賽をつかつたといふ、桐島屋の胴元は、何といふ奴だらう？」

「それがサ。憎いぢやないか。四萬の角藏だよ。」

「えッ。」

お常は木枕の頭を擡げて、お花の顔を凝乎と見詰めた。

前科二犯の博徒宮崎熊次郎は、前橋監獄服役中に、隣村四萬のやくざ角藏に、繩張りを荒され、乾兒まで奪られてしまつた。熊次郎が二度目の苦役を終へて出て來た時に、三原近郷の旦那衆が、祝ひ博突を催すと、待構へてゐたやうな手入れで、熊次郎はまた監獄へ逆戻りさせられた。これは四萬の角藏が其筋に密告したためであるといふ事實が、角藏身内の者の不和からバレたのだ。元から大した親分ではない熊次郎一家の世帯は、たうとう一升の米も買へない苦境に陥つてしまつた。内職の豆腐



では生計が立たない。お花は意を決し恥を忍んで、硫黄運搬の女馬士になり下つた。海拔六千尺の硫黄山（米無山）から信州杵掛の間屋場まで、往復十二里の山道を、腹毛に氷柱の下る荷馬を曳いて歩いて、握る賃金がたつた三十銭！ 母子はそれで生きてゐるんだ。

「忌々しい畜生めッ。」

お常は唇を噛んで唸つた。

### 三

久次郎の躰やお常の寢息が微にきこえる。茶の間の古箏箏をあけたお花は、一張羅のよそゆきを取出した。長襦袢に着物に羽織に帯に塗下駄……これを着た姿は竹本鶴千代太夫に酷似だと、彼女の友達がいふのである。鶴千代太夫といふのは、時々この邊にやつて来る田舎廻りの娘義太夫なんだ……それから抽斗の奥底に藏はれてゐる白絞袴の七首を搜り出した。袴を拂へば行燈の灯にも、又は身の竦むほど寒く光る。それと一纏めに風呂敷に引包み、小脇に抱へて茶の間を出ると、臺所から雪靴を穿いた。吹雪は夙に止み、晴れ渡る空には寒月が照り耀いてゐた。三里の雪道を草津めざして、お花は天馬の飛ぶ速さ。流石に山の娘は馴れたものだ。四萬の角藏が草津まで荒してゐる事實を、久次郎

の話で知つた彼女は、今に父の仇を取る機会もあるだらうと思つて、無念の涙を吞んでゐたんだが、日頃の恨と、義憤とが一緒になつて、たうとう燃え上つたのである。

### 四

草津温泉の湯畑から、西の嶺へぬける道に琴平神社があつて、石段の下は昔の花柳街。明治屋といふ看板の、小さい格子造りが、草津の奇人按摩で通るお花の叔父、宮崎千長が住居だ。千長は内弟子の鐵公といふ目明按摩に、肩を揉ませてゐた。女房は炬燵酒——この人は死ぬまで、日に一升の酒を缺かさなかつたといふ女酒豪だ。——お花の顔を見ると、みんな驚いた。

「お母の容態でも悪くなつたんぢやねえか？」

「いゝえ。そんなことぢやないんです。叔父さんに、少しお頼みの筋があつて来ました。聞いて下さるでせうね？」

「あれだ。はゝゝ頼みの筋もいはねえ先に、聞いてくれるだらうねえ、と来るんだ。何だか知らねえが、眞ツびらお断りだといつたつて、雪の夜道を押して來をほどだからな、承知させずにや、置かねえ量見だらう。」



「だつて、他に縫りつく先がないんだもの。」

「あゝ。いゝとも！ 首でもやりてえ可愛い姪だ。頼みつてな、何だい？」

「お金が欲しいんです。」

「金か？」

「えゝ。叔父さんの財布の中に、有るだけで結構と言ひたいんだけど……すみません。吃と返しますから、何家かで借りて下さいな。」

「いくら要るのか？」

「十圓ばかり。」

「十圓？……あはゝゝゝ。俺の財布に有るだけで結構と言ひたいんだが、なんて大きなことをいふから、何百兩いるのかと思つたら、たつた十圓か？」

「たつた十圓かなんて、叔父さんの財布に有つたことがあるの？」

「はゝゝ、笑せやがる。十兩でよけりや……おい。おツ嬢……その火鉢の抽斗から、俺の財布を出してくれ。」

女房は火鉢の抽斗から掴み出した財布を、千長の膝の上に投げやつた。その中から十圓紙幣を搜り

出した千長は、それと言つてお花に手渡した。

「まあ！」

「ほゝゝ。叔父さんの金持に面喰つたのかい？ 花ちゃん。」

「えゝ。何だか氣味が悪い。」

「厭だよツ。氣味がわるいなんて挨拶があるかね。偶には、こんなこともあるのサ。それはね。叔父さんが藝を演つた褒美に頂いたんだよ。湯治のお客様が……千長は大層カンのいゝ按摩といふ評判だが、一つカンのいゝ處を見せてくれないか……と仰つたんだ。ハイ、畏まりました。何か演つて御覽に入れませうてんで、丁度其時、膝の下にムズムズしてゐた蚤を、指の先で掴取つたンサ。それからお客様に糸を貰つて……ハイ。この糸をもちまして、この蚤の手足を縛つて御覽に入れます……と言ひながら、糸よりも細い蚤の手足を、物の見事に引括つて、宙にブラ／＼吊して見せたところが……こりア目明にも出来る藝ぢやない……といつて大層感心なすつて、十圓づつお褒美を下すつたんだよ。」

「まあ！」

お花も知つてゐる。叔父千長のカンの働きは、全く人間業とは思はれないのだ。或時彼は生きた鶏



を手土産に、この草津温泉から三原宿のお花の家へ歩く途中で、片抱きしてゐた鶏に飛び逃げられたことがある。茫漠たる平野に脱走した鶏を、捕へ得る者があるだらうか？ 盲目の千長は一本の杖と異常なカンをもつて、鶏の所在を嗅ぎつけ嗅ぎつけ、動きの取れぬ窮地に追詰めて引捕へたのである。

「花ちゃんは、何で十圓といふお金が要るのかい？」

「それ、言はなくつちや、いけない？」

「いけないとは言はないけど、何に費ふの？」

「いゝぢやねえか。氣持よくやつたものを、何に費はうと！ 女郎買ひはすめえし、なあ、お花坊。

あつはつはつ。お前、これから三原へ歸るのかい？」

「えゝ。ちよつと用達をしてから。」

「氣の強い娘だな。」

「馴れてるんですもの。戸外は月明りで晝のやうだわ。どうも有難うございました。」

上框で雪靴を穿くと、風呂敷包を抱いて、お花は戸外へ飛出した。温泉町は夜十一時頃。

## 五

地藏の湯の畔なる料亭重田屋の女中お政は、お花と幼友達だつた。お花はこゝで四萬の角藏が賭場を開いてゐる家が、旅籠屋桐島屋であることを確かめた。

「何ぞ用かい？」

「うん。實はね。竹本鶴千代といふ田舎廻りの義太夫語りが、桐島屋に集うてゐる旦那衆の、お仲間へ入れて戴きに参りますから、宜敷くお取成し願ひますといふ頼みなんだ。私の知合だけど、私は桐島屋の番頭さんも女中さんも知らないから、政ちゃんに行つて頼んで貰ひたいんだよ。」

「いゝとも。」

お政は裏口から出て行つたが、暫くすると戻つて來た。

「承知いたしましたとよ。」

「さう。御苦勞様。」

重田屋の裏口から横丁へ曲ると、お花は身を翻へして、地藏の湯（共同浴場）へ飛込んだ。この時刻には一人の浴客もゐず、浴槽から立のぼる湯気に、壁洋燈の光も朧ろに霞んでゐた。彼女は緋の筒袖と山袴を脱いで、携帯の晴衣に着替へ、束ね髪をバラバラ解いた。百姓服は函棚へ、十圓紙幣と七首は懐中だ。雪靴を塗下駄に穿替へて、浴場を飛出した彼女は、生れて始めての度胸試し、伸るか反



るかの冒険に向つたのである。曲りくねつた狭い坂道を辻へ下ると、左手は軒並の旅館屋で、十軒目が其頃の桐島屋だつた。旦那博突の胴敷は二階の廣間だ。胴元の角藏と乾兒らしい男どもと、湯治客とを合せて十二三名。正面に胡坐を搔いた五十がらみの男が、太眉を動かしてギロツとお花を見た……角藏だなッ。親父を監獄にぶち込みやがつたのは、此奴だッ。畜生ッ……さう思ひながら、彼女は落着いた態度で、端近の客に會釋した。

「お仲間に入れて下さいまし。」

「いよウ。師匠つてのは、お前さんかい。おツそろしく若い姐さんだね。あすこに席が空いてるよ。それは胴元から五人目の座席だつた。座敷に入つて衆目の的になつた時は、胸がドキドキしたが、座席に坐ると、だんだん氣が落着いて来る。博突打の娘だ。十圓紙幣を出して渡すと、角藏が鼻で笑つた。

「それツきりかね？」

「はい。負けたら負けに時の相談です。」

お花は空嘯いた。

「お聞きになりやしたか？」

「へい。あの妙齡で賭場入りするんですからな。素人筋ぢやござんすめえ。」

「太夫商賣よりや袁彦道が本業ぢやねえか？」

「知れねえ。失禮ながらお幾歳だらう？」

「さあ。あれで存外年齢を食つた代物かも知れません。女は重寶でげすな。負けたら負けの相談ですなんて、いざとなりやア、體を投出す魂膽らしい。買手はないか。面は二の町でも、洗髪は凄うがすぞ。」

東京邊から湯治に來たらしい旦那姿の下馬評だ。角藏は意味ありげな苦笑を洩しながら、お花の元金をコマに替へて彼女に渡した。

## 六

「丁か半か？」

「丁ッ。」

「半ッ。」

303  
壺振り腹巻一つの素裸だ。最初五圓張つたお花のコマは、三四回目になると、元の五六倍になつ



て彼女の手元に積まれ、取つたり取られたりの客の中で、彼女ばかりが取る一方なのは、目醒しくも奇異な光景だつた。術も法もない。運なんだ。

「丁か半か？」

「丁ッ。」

「半ッ。」

「丁ッ。そつくり張つたッ。」

とお花はコマを全部積上げた。胴元が言つた。

「いゝのかい。姐さん。」

「いゝんです。」

「お調子に乗つちや危いよ。」

「心配しなさんな。貸元。姐さんには福の神がついてるから、半は出ないよ。」

「出たら出た時の相談だよ。」

旦那衆がドツと笑つてお花を見た。瞬間。壺振の手が尻へ廻つた。誰も気づく者はなかつたが、博奕打の娘は見遁さなかつた。彼女は壺振の手に飛びついた。

「な、な、何をするんだッ？」

「この手を開いてもらひませう。」

「ふ、巫山戯ちやいけねえ。」

「厭だといふのかい？」

「當りめえだッ。」

「馬鹿野郎ッ。丁半仁義は一番開いてくれと言はれて、いけ酒啞々々断る奴が、何處の世界にあるんだッ。開かなきゃア、これだッ。」

お花の懐中から鞘走つた七首が、壺振の胸先でギラツと光つた。彼女の血相は既に變つてゐたのである。アツといつた形で、みんな氣を吞まれてしまつた。眞蒼になつて唇を顫はしてゐる壺振の右の掌から、小さいものがコロリと落ちた。どちらを向いても、半ばかり出るやうな細工の鉛賽。

「それ見ろッ。睨んだ通りのイカサマ賽だ。こんなことだらうと思つて、油断はしなかつたが、危いところでペテンに引かゝるんだつたよ。やくざ仲間の面汚しめ。お前のやうな盗人根性の奴があるから遊俠仁義が亂れるんだッ。」

さういつて、お花は角藏に向つた。



「もし。貸元。私はこれでお暇するから、私の持ちゴマを地金に替へて貰ひませう。」  
「うむ。」

角藏は心中の激怒を抑へてゐるらしい凄い面つきで、傍の乾兒に目配せした。お花の持ちゴマは彼女の前で數へられ、地金に替へられた。彼女は五十餘圓の紙幣を、帯の間に押込んだ。その大膽な振舞に一座は驚嘆の眼を見張りながら、息詰るやうに緊張した沈黙を守つた。が、それは嵐の前の静けさでしかなかつた。

「汝。待てツ。」

立上つてゆくお花の背後から、裸の壺振が豹の勢ひで躍りかかり、抱竦めるやうにして、七首を握りしめてゐる彼女の手を掴んだ。身をかはすひまもない。肩に流れる黒髪、颯と空に靡いて、二人諸共、横なぐりに蹴めき倒れたが、硫黄山で鍛へたお花の力は、易く七首を奪はれるほど脆くはなかつた。死にも狂ひの彼女は、我が手をもぎ放すが早い、扭伏せられてゐる下から、東も通れと一刺しグサと刺した。七首は壺振の肩を掠めて小鬚を突斬つた。アツとのけ反る隙に跳ね返して起上つたお花は、廊下口の障子際へとびのいた。裳は亂れて脛もあらは、黒髪は顔にかゝつて、おどろくしく血に染んだ七首を逆手に、眦を引裂いた形相は、夜叉のやうに物凄かつた。半顔血まみれの壺振は、

角藏の乾兒に抑へられて、猛犬のやうにいぎり立つてゐる。警察のない維新前なら、こんなものではなからう。高の知れた娘風情に、胴敷のからくりを發かれ、壺振を斬られたんでは、渡世人たるもの黙つてゐられる譯はないのだが、素直に金を渡したのも、壺振を取抑へてゐるのも、事を荒立てれば彼等自身の損であるからだ。肩で風を切つて押歩いた博徒が、今は見つかり次第に監獄へ叩ツ込まれる。大親分の白金屋さへ檢擧られた。こんな半チクの博突打が、御用風を恐れること、一通りではなかつたのだ。お花は息を喘ませて言つた。

「おい。貸元。お前さんが見込みつけた壺振なら、素人ぢや追つかない手並だらうが、相手を見てやらなくつちや、今のやうに失敗するよ。この私を誰だと思ふんだ？」

「な、何だと？」

「お前さんのお蔭で、臭い飯を戴いてゐる三原の熊次郎の娘だよ。ほゝ。用があつたら何時でも來るが、浅間山は動いても、三原の花は動かない。ピクともしないよツ。」  
狼狽する角藏を尻目に、お花は悠々立去つた。



桐島屋から地蔵の湯に引揚げて、積重ねたる湯揉板に腰を下すと、張切つてゐた氣が弛んで、お花はぐつたりしてしまつたが……いけない。こんな處で愚圖々々してゐちや危い。角藏等のことだから追かけて仕返しに來ないとも限らない……彼女は彈ね飛ばされたやうに立上つた。着物に下駄では三里の雪道は歩けない。俄仕立の娘義太夫は、再び元の女馬士に早變りだ。それは衣粧と七首を風呂敷に包んで下駄を腰に下げ、雪靴を穿いてゐる時だつた。誰もゐない筈の浴場の外に、容易ならぬ物音が不意に起つたのは！「えいつ。」といふ氣合につゞいて「うゝゝゝ。」と呻いてドツと倒れる物の地響だつた。時が時、場合が場合なので、お花は跳び上らんばかりの驚愕に打たれた、が、聞も音も、それツきりで、四邊は元の静けさに還つた……何だらう？……お花は激しい動悸を抑へながら、戸口の外を怖々覗いた。滴る月光を浴びて、路上に黙然と突立つてゐる男がある。

「鐵さんぢやないか？」

「へゝゝ。お仕度は出來やしたかい？」

「まあ。膽を潰したよツ。」

「そら、そこに伸びてる野郎を御覽なせえ。」

眼明按摩の鐵公が、杖でさす浴場の板塀の下には、禪に腹巻一貫、向鉢巻に血の沁んだ男が、拔身

の脇差を持つたまゝブツ倒れてゐた。

「角藏の壺振ですよ。後に眼がねえツたつて、このくらゐ呑氣な野郎もねえな。此奴、坂下の辻からお前さんを尾行て來たんだが、その後を、この俺に尾行られてゐることは、知らねえんだ。お前さんが着物を着替へるから雪靴を穿くまで、それ、その板塀の穴から、覗いてやがつた。」

「まあ。」

「はゝゝ。お前さんが雪靴を穿いちまふと、野郎、板塀の節穴から眼を外して、脇差を振りかぶり、戸口の方へ忍び寄つて行く。お前さんが出て來るところを、バツサリやらうてんだね。卑怯な野郎だ。こん畜生と思つて、奴の後から、この鐵の棒で……こいつは桐島屋の鉢垣から引ツて抜いて來たんだが……奴の頭をガンとやつたら、引ツくりかへりやがつたんです。」

案の定、意趣返しに追跡したのだ。按摩の鐵公が働いてくれなかつたら、壺振りの刃にかゝつたんだ。お花の胸は危難をのがれた喜びで一ぱいになつた。

「鐵さん。有難う。御恩は一生忘れません。」

「いや。そいつはお前さんの叔父御に言ふことだ。お前さんが家を去ると直に、お前さんの後を尾行てくれと、師匠が言ひなすつたんだ。十圓紙幣を受取る手の指が震へてゐたつてね。そはそはしてゐ



たよ。だから俺は見え隠れにお前さんを尾行た……ちよいと用達をしてから、三原へ歸ります……なんて、お前さん、ちよいと大變な用達をしたもんだね。桐島屋の二階廊下の障子に、穴あけて見物してゐたんですが、壺振のいかさまを見破つて、七首で脅かしたね。こいつア大事にならなきやいゝがと氣を揉んでゐると、あの騒ぎでせう。俺ア既のことに飛出すところだつた。まあ無事で歸れて仕合せといふもんだが、あゝ小ツびどく面皮を剝かれちや、四萬の角藏も草津ちや盆は敷けますめえからこれを遺恨に何か仕出かすかわかりません。現にこの壺振がさうだ。己が不首尾を面目なさに、お前さんを斬りに來たんぢやねえですか？ 氣をつけなくつちや、いけませんぜ。あの時だつて、娘義太夫なら義太夫でいゝものを、熊次郎の娘だの何だのと、驚いたね。いくら膽ツ玉の太い娘さんかは知らねえが、どだい、十八娘のするこつちやねえですよ。」

「だつて口惜しいんだもの。名乗りでも揚げて驚かさなくつちや、この胸が晴れないぢやないか。角藏め、咆え面かいてたつげが、草津の細張りがフイになりや、態ア見ろだ。」

「それは尤もですが、親の仇討うちなら他に手段がありさうなもんだ。お父さんの博突は鹽斷ちまでして諫めるお前さんが、大嫌ひな博突の元金を、師匠に借りてまで、盆莫塵の上の危い腹癒をする量見がわからねえや。」

「それはね、運よく勝つたから言ふんぢやないけど、少しお金のいる事情があるから、最初の最後だと思つて行つたこと。打明けて言ひませう。」

お花は久次郎の一件を持出した。

「へへえ！ ぢや仇討は刷毛ついでか？」

「だから勝負で取つたお金は久次郎さんに持たせて、足利へ歸すのサ。これで私も義理が立つといふもの。どうか此事は叔父さん達に黙つてゝおくれな。女だてらに生意氣な俠氣だなんて叱られるからね。」

「よし。わかつた。俺さへ黙つてりや、師匠のカンでも見抜けめえからな。はゝゝ。いや感心だ。偉い。女に生れたのが惜いね。」

「厭だよ、この人は、ほゝゝ。あゝ、月が傾いた。夜が明けると面倒だ。私歸るわ。」

「安心しておいでなせえ。俺はこの裸ン坊が凍死しねえやうに、浴場に引摺込んで、お前さんの姿が見えなくなるまで、ここに頑張つてゐませう。」

按摩の鐵公が後を引受けたのである……北上州の名物女『三原の花』が俠名を賣出すの一幕。彼女が十八歳の時の初舞臺だつた。



(作者附記)——お花はこの年(十八歳)婿養子を迎へて、一女さかえを生んだが、夫のやくざに愛想をつかして放逐離籍した。以來獨身で世路の艱難と戦ひ、波瀾を極めたる數十年の奮闘の中に、今日の名をなしたのである。本年(昭和十六年)は六十九歳になるが、壯者を凌ぐ元氣で活動をつゞけてゐるであらう。

昭和十七年五月五日印刷  
昭和十七年五月十日發行



山の人生 壹圓五拾錢

著者 大泉黒石

發行者 東京市下谷區車坂町八九 鈴木勝也

印刷人 東京市神田區錦町三ノ二 菅生定祥

東京市下谷區車坂町八九

發行所 大新社

電話下谷(83)四七六七番  
振替東京一七一七七一番  
文協會員番號一一六〇九〇

配給元

日本出版配給株式會社  
東京市神田區淡路町二ノ九

協榮印刷所印刷



内山雨海著

# 俳句の書き方

豪華版 四圖 (三千〇)

伊東深水・下村爲山畫伯の多色刷句畫挿入  
古今大家参考筆蹟を始め寫眞、凸版百數十個

## 堂々、世に問ふ俳人座右の書

俳句は書いてこそ雅趣があるもの。字の上手下手は問題ではない。書法にさえ叶つて居れば誰れにも書けるもの。俳句は作るが書けぬ人が如何に多きか？本書は色紙、短冊、扇面、額面等の書き方から雅印に至るまで懇切丁寧に、初心のものにも分る様解説したもの、けだし俳人必携の書として好評噴々。

二千部限定出版

大新社

東京市下谷區車坂町八九  
振替東京一七一七七一番

賣切れにならぬうち御申込乞

歌誌「花房」主幹  
高橋英子女史著

## 歌人隨筆

すゝめ

B6版 三三〇頁  
一圓六十錢(七一五)

惻々胸を衝く、女史半生の隨想録！

或る時は亡夫を想ひ又或る時は愛兒を語る、その美麗なる文章、多忙なる歌人生活の中に

思ひ出づるまゝに綴り思ひ出づるまゝに歌ふ

「隨筆すゝめ」はかくして生れた。しかも女史半生の大記録として……

大新社

東京市下谷區車坂町八九  
振替東京一七一七七一番



醫學博士 横尾秋夫 著

健康を創る力

逞ましき健康・頑丈な身體

健康は、薬か食物か？ それもあるが、忘れられてはならぬ大切なことが未だあるのです。

どんな激務にも疲れぬ體をつくるには？ 快食

快便・快眠を得るには？ 明朗潤達な性格をつ

くるには？ そして百歳長壽作戦を樹てるには

——どうしたらよいか？ 本書は著者二十年の

臨牀生活の研究と體験による病・苦・憂を救ひ

常に若く逞ましき體力をつくる大東亞戦下全圖

民の寶典だ

忽ち増刷・既に八版

大 新 社

東京市下谷區車坂町八番  
振替東京一七七一七番



946  
35



終

